

昭和56・57・58年度

高槻市文化財年報

高槻市教育委員会

はじめに

本市には市民生活の歴史や文化を知るうえで貴重な資料が数多く残されています。これらの文化財を保存・保護し後世に伝えるために、昭和44年に文化財保護条例を制定し、今日まで各種の文化財の調査を実施してきたところです。同時に、遺跡発掘地での現地説明会や歴史講座を開催するなど文化財保護の重要性を強く市民にうつたえてきたところです。

特に、昭和57年度では、阿武山古墳において、史跡指定を前提とする確認調査を実施し、数多くの成果をあげることができました。その結果、国の史跡指定を受け永久に保存されることになりました。また、芥川遺跡や芝生遺跡の発見、岡本山古墓群や嶋上郡衙跡の調査などは、郷土の歴史を知るうえで重要な手がかりを得られたものと考えています。一

方、昭和57年7月には旧笠井家を移築復元し、本市にとって文化財保護思想普及の拠点としての市立歴史民俗資料館が開館して、市民に公開できるようになり、今まで多くの市民の方々のご来館がありました。今後一層充実した館として期待に添えるよう努力する次第であります。

本書は、これら埋蔵文化財の発掘調査をはじめ各種文化財保護事業について、昭和56年度から58年度に至る3年間の概略報告であります。今後の文化財保護活動や郷土を知るうえで少しでも役にたてば幸いと考えております。

なお、本書を刊行するにあたり、数多くの関係者にご協力をいただき、心よりお礼を申しあげます。

昭和60年3月30日

高槻市教育委員会

社会教育課長 西阪 弘

目 次

I 文化財保護啓蒙事業	1
1. 昭和56年度	1
2. 昭和57年度	1
3. 昭和58年度	1
II 指定文化財	3
1. 国指定史跡	3
2. 市指定	3
III 埋蔵文化財の調査	4

図 版

P L. 1	市指定文化財
P L. 2	埋蔵文化財調査位置図
P L. 3	埋蔵文化財調査位置図
P L. 4	阿武山古墳

P L. 5	岡本山古墓群
P L. 6	岡本山古墓群
P L. 7	岡本山A3号墳・嶋上郡衙跡
P L. 8	嶋上郡衙跡
P L. 9	嶋上郡衙跡
P L. 10	尼ヶ谷古墳群
P L. 11	尼ヶ谷・唐井谷古墳群
P L. 12	教行寺跡
P L. 13	塚脇古墳群
P L. 14	塚脇古墳群
P L. 15	芥川遺跡・芝生遺跡
P L. 16	安満遺跡
P L. 17	安満遺跡
P L. 18	安満遺跡
P L. 19	阿武山古墳
P L. 20	嶋上郡衙跡
P L. 21	岡本山古墓群
P L. 22	安満遺跡



I 文化財保護啓蒙事業

1. [昭和 56 年度]

(A) 現地説明会

昭和 56 年 8 月 2 日 塚脇古墳群発掘調査
昭和 57 年 3 月 23 日 安満遺跡遣構確認調査

(B) 展覧会

昭和 56 年 8 月 21 ~ 23 日 「夏休み子ども文化財教室」 わが町の歴史講演会並びに体験学習として土器洗いを実施

(C) 歴史講座

「近世・近代・現代の高槻」
昭和 56 年 10 月 1 日 「キリストンの時代から鎖国へ」
昭和 56 年 10 月 15 日 「近世高槻の身分制と民衆生活」
昭和 56 年 10 月 22 日 「幕末動乱と高槻地方」
以上、酒井 一氏（龍谷大学教授）
昭和 56 年 10 月 23 日 「明治時代の高槻地方の変ぼう」
昭和 56 年 10 月 30 日 「大正期の人権問題と社会運動の発展」
昭和 56 年 11 月 6 日 「戦時体制下の高槻地方の民衆」
昭和 56 年 11 月 13 日 「戦後高槻の変ぼう」
以上、細尾幸作氏（市史編纂委員・府立島上高校教諭）

(D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数 5,196 人（延人数 27,086 人）

2. [昭和 57 年度]

(A) 現地説明会

昭和 57 年 6 月 20 日 阿武山古墳範囲確認調査
昭和 57 年 7 月 11 日 岡本山古墓群発掘調査
昭和 58 年 1 月 27 日 安満遺跡遣構確認調査

(B) 展覧会

昭和 57 年 8 月 20 日 ~ 23 日 「夏休み小展覧会」

岡本山古墓群を中心とした展示

木村省自氏製作・塚脇古墳群発掘調査の 8 ミリ記録映画「古墳を掘る」を上映

(C) 歴史講座

「市立歴史民俗資料館記念講演会」

昭和 57 年 7 月 10 日 「旧笛井家住宅と高槻の民家」 川上貢氏（京都大学教授）
昭和 57 年 7 月 13 日 「上方町人のくらし」 脇田修氏（大阪大学教授）
昭和 57 年 7 月 16 日 「くらしと台所」 山崎雪子氏（日本民家集落博物館長）
「日朝文化交流史講座」

昭和 57 年 11 月 18 日 「新羅焼と須恵器」

原口正三氏（立命館大学講師）
昭和 57 年 11 月 26 日 「飛鳥仏と朝鮮半島」 井上 正氏（京都国立博物館）
昭和 57 年 11 月 30 日 「室町・戦国期の日朝関係」 三浦圭一氏（立命館大学教授）
昭和 57 年 12 月 10 日 「江戸時代の日朝関係」 藤井謙治氏（神戸大学助教授）

(D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数 5,614 人（延人数 32,700 人）

(E) 市立歴史民俗資料館入館者数

昭和 57 年 7 月 10 日 開館

総数 16,413 人（男 8,853 人 女 7,560 人）

3. [昭和 58 年度]

(A) 現地説明会

昭和 58 年 11 月 23 日 鳴上郡衙跡発掘調査

(B) 展覧会

昭和 58 年 8 月 21 日 ~ 23 日 「夏休み子ども文化財教室」 安満遺跡・阿武山古墳・岡本山古墓群・今城塚古墳等の出土遺物を中心に展示
文化財実習 「古代の火おこし」

(C) 歴史講座

「考古学から見たわが町の歴史」

昭和 59 年 3 月 21 日 「中世の祈りとまつり」

昭和 59 年 3 月 23 日 「今城塚古墳と阿武山
古墳」 水野正好氏（奈良大学教授）

昭和 59 年 3 月 26 日 「弥生時代の墓制」

昭和 59 年 3 月 28 日 「奈良時代の集落」

田代克己氏（帝塚山短期大学教授）

昭和 59 年 3 月 30 日 「近世高槻城の築城について」 森田克行氏（市立埋蔵文化財調査センター）

(D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数 5,312 人（延人数 38,012 人）

(E) 市立歴史民俗資料館入館者数

総数 18,212 人（男 9,498 人 女 8,714 人）

延人数 34,625 人

Ⅱ 指定文化財

(1) 国指定史跡

名 称 阿武山古墳

所 在 地 高槻市奈佐原・茨木市安威

指 定 日 昭和 58年 8月 30日 文部省告示
第 113号

阿武山古墳は、大阪府北部の三島地方のはば中央にある阿武山の丘陵末端に築成された古墳時代終末期の古墳で、昭和 9年の京都大学地震観測所増設工事によって発見された。

古墳は、標高 212m の丘陵頂部に築かれ、正面をほぼ南に向ける一辺 18m の方形の高まりがあったようであるが、現在はほとんど削り取られ基底部のみが残されているにすぎない。内部主体は、この方形中央部にそれと方位をそろえて構築された石室で、石室内には央紗棺が納められている。石室の石材は花崗岩が主であるが、一部に博が用いられ、石積のすきまは漆喰で充填され、壁面には漆喰が全面に塗布されている。床面には博や石が敷かれ、中央に薄手の博を重ねた棺台が設けられている。

央紗棺は、身と蓋からなっており身・蓋ともに 20枚以上の布を重ねて漆で固め、外面を黒漆、内面を朱漆で仕上げたもので、遺存度はまれにみる良好なもので、完形品として発見された。

央紗棺の中には身長 164.95cm の 60 才前後の男性が葬られていた。棺底に衾を敷き、頭部を枕に乗せ、遺骸の上には薄い布が掛けられていた。枕は、大小 2 種のガラス玉を銀の針金で連ねたものを組合せて芯とそれを布で巻いたものである。

方形壇状の施設を中心としてその外を円形にめぐる溝があり、この溝は古墳の墓域を画する施設と考えられる。

本古墳は、墳丘の規模、石室の構築形態、央紗棺の存在などから、古墳時代終末期に属するもので、遺構・遺物の内容や遺存度が他に例をみない特別なものであること、また墓域が明確にされていること

など、非常に貴重な遺跡であり、我が国の古代墓制を考える上で欠くことのできないものである。

(2) 市指定

名 称 三好長慶水論裁決状（永禄 2 年 5 月 19 日）及び三好家奉行衆連判裁許井手絵図 全 2 卷

所 有 者 高槻市大字郡家財産区

寸 法 （裁決状）縦 27.9cm • 橫 45.5cm
(絵図) × 32.5cm • × 45.0cm

紙 質 奉書紙

指 定 日 昭和 58 年 11 月 1 日 高教委第 11 号
本文書は、永禄 2 年（1559）5 月、真上・郡家の間でおこなわれた芥川筋井堰（井手床）をめぐる争論について、三好長慶の下した裁決状である。芥川と井堰の箇所を示した絵図を付し、松永久秀・三好長逸・石成友通の連判が記されている。

芥川から用水をひくために井堰を設けるのであるが、それをめぐって真上側は昔から井堰はないと言張り、双方絵図まで提出して争ったが明確な証拠がない。そのため、芥川城主三好長慶は検使を現地に派遣して調査させた。その結果は、郡家の主張通り、年々使用している井堰のあることが判明し、三好長慶は郡家に理があると裁決した。

三好長慶は、阿波に根拠をもち、また本市芥川城主として当時畿内でもっとも実力をもった戦国武将であること。この翌年には河内へ進出し、居城を四条畷市の飯盛城に移す。奉行の松永・三好・石成も著名な武将である。

したがって、本文書は畿内の著名な戦国武将の水利支配の実態を示すものとして貴重なものであるとともに、日常的には郡家惣などの農民自治組織によって管理されていたことを示すものである。

III 埋蔵文化財の調査

1. 阿武山古墳

所在地 高槻市大字奈佐原 944

調査面積 5,000 m²

調査期間 昭和 57 年 5 月 10 日～6 月 29 日

届出理由 史跡指定を前提とした確認調査

「貴人の墓」として著名な阿武山古墳は、京都大学阿武山地震観測所のすぐ北、俗称「美人山」と呼ばれるところに位置し、三島平野を一望に見渡せる場所に立地している。今回、阿武山古墳の史跡指定を前提とし、古墳の範囲を明らかにする目的で小規模なトレンチ調査を実施した。

遺構

阿武山古墳は、阿武山（標高 281 m）から南に延びる尾根の先端部の平坦面を利用して造られた古墳である。今回の調査では、古墳の盛土はまったく認めることができなかったが、石室を中心に設けたトレンチでは、低い段と溝を検出した。これらの段および溝は石室を中心として、方形にめぐっており、一辺約 18 m を測る。この方形区画は、地下の石室構築直後の地山整形と考えられるが、具体的な意味あるいはについては、今回の調査では明確にすることはできなかった。

排水溝は、地表下約 3 m 挖り下げた楕円形の基壇から、南斜面を約 30 m の長さにわたって設けられていることがわかった。排水溝の規模は上幅 0.7 ~ 0.9 m を測り、断面は V 字状を呈する。底面には巨大ないし人頭大の山石を 2 ~ 3 段積にして暗渠としている。排水溝の方向は、磁北に対して西に約 13 度偏っている。

今回検出した周濠は、前回の調査時に、約 0.5 m の段が直径約 82 m の範囲でめぐっているとされるものにあたる。規模は、地形が斜面地であるためバラツキが認められ、上幅 2 ~ 2.7 m、下幅 0.5 ~ 1.2 m、深さ 0.3 ~ 0.7 m を測る。濠の直径は、東西径約 84 m、南北径約 80 m を測り、ほぼ真円に近いも

のである。

遺物

遺物の総量はトレンチ調査であるため非常に少ない。墳頂部南側で認めた段状遺構近くで、須恵器の甕腹片 2 点が、排水溝の埋土中から赤褐色を呈した埴片 1 点が、同溝から須恵器の蓋杯 6 点と甕片 3 点と土師器片 1 点が出土している。

所見

今回実施した阿武山古墳の範囲確認調査は、小規模なトレンチ調査であったため、昭和 19 年、同古墳発見時に実施された調査結果とあまり変化のないものである。しかし、墳形については、石室が存在するところに一辺約 18 m を測る方形の盛土が確認されたことである。阿武山古墳の年代については、前回の石室内部の調査でも決め手となる遺物が少なく、時期を明確にすることはできなかった。しかし今回の調査では、破片ではあるが周濠から須恵器の蓋杯・壺・甕片が出土し、一応古墳の年代を推定する手懸を得た。各トレンチから出土した須恵器は、陶邑の須恵器編年によると、所謂Ⅱ期の終末期と考えられるものである。正確な年代決定については、今後の研究にゆずるが、一応、7 世紀の第 1 四半期と第 2 四半期との間とするのが妥当である。（大船）

2. 新池窯跡

所在地 高槻市上土室町 3 丁目 706 他

調査面積 1,500 m²

調査期間 昭和 56 年 11 月 16 日～18 日

届出理由 畑地開墾

遺構・遺物

当該地は、新池窯跡の北方約 200 m に位置する東斜面地である。調査は池に接近した斜面地に、幅 1 m、長さ 20 m の第 1 トレンチと、幅 1 m、長さ 10 m の第 2 トレンチを設けて、窯跡および灰原の確認をおこなった。調査地は昭和 30 年頃まで水田として利用されていた所で、耕土（0.1 m）を除去すると地表面は黄褐色沙層～黄灰色粘土層となり、埴輪窯の存在を推測できる遺構・遺物はまったく検出するこ

とができなかった。

所 見

今回の調査結果から推測すると、新池埴輪窯の分布範囲は、北側の中ノ池の東斜面地まで拡がっていないことが考えられる。（大船）

3. 番山古墳

所 在 地 高槻市上土室町 5 丁目 462 他

調査面積 108 m²

調査期間 昭和 56 年 11 月 4 日～11 月 14 日

届出理由 道路改修

遺 構

調査地は、番山古墳の北東部の外堤と濠の一帯である。外堤の層序は、耕土（0.3 m）、暗灰色土層（0.1 m）、暗茶褐色土層（0.2 m）、暗黄土色土層（0.2 m）、黄褐色土層（地山）である。また濠内の層序は、耕土（0.2 m）、床土（0.3 m）、暗灰色粘質土層（0.4 m）、青灰色砂層（地山）となり、外堤部上面と濠底との比高差は約 1.2 m を測る。

外堤の調査区では、原位置を保った円筒埴輪と形象埴輪の台部の 2 点を検出した他、ほぼ原位置で破壊したと考えられる円筒埴輪と家形埴輪の破片を同じく 2 ケ所から検出した。埴輪の距離は、両者ともそれぞれ約 2 m を測り、ほぼ等間隔に、円筒埴輪と形象埴輪が並べられていたことが考えられる。

遺 物

出土遺物は、古墳外堤部の調査であるため大部分は埴輪であるが、須恵器・磁器片も若干検出されている。円筒埴輪は径 30～34 cm、器厚 1.5 cm を測り、外面は刷毛調整を施し、外面のみ 2 次調整の横刷毛が施されている。また外面の上段には、赤色顔料が塗付されている。胎土は須恵質化したものもあり、砂粒を多量に含んでいる。

所 見

番山古墳のプランは、南西向きの帆立貝式前方後円墳であり、東方約 1 Km に位置する前堀古墳とまったく同一設計で造られていることが知られている。今回の調査では、外堤に埴輪列を検出したのをはじ

め、濠の深さについても新しい知見をえることができた。築造時期については、埴輪の形態などから 5 世紀後半頃のものと推定される。（大船）

4. 番山古墳

所 在 地 高槻市上土室町 5 丁目 459-1 他

調査面積 250 m²

調査期間 昭和 56 年 12 月 7 日～16 日

届出理由 池の護岸工事

遺構・遺物

当該地は、番山古墳の南側周濠を利用して造られた農業用貯水池である。今回の護岸工事は、北側の水田を風波作用による破壊から護るために、コンクリート製の擁壁に造り変えるものである。調査は、護岸工事の掘り方と並行して実施した。西側外堤の層序は、表土（0.15 m）、黄土色土層（0.4 m）、黒色土層（0.2 m）、暗黃褐色土層（0.6 m）、暗灰色砂質土層（0.4 m）、黄褐色粘土層（地山）である。北岸部の層序は、耕土（0.3 m）、暗灰色土層（0.4 m）、暗灰色砂質土層（0.3 m）であり、掘さくる範囲では地表面を検出することができなかった。出土遺物は、今回の調査が表土に近い部分であることと、池の底の堆積層であることから、まったく検出することができなかった。

所 見

今回の調査は、池の護岸工事に伴うもので、調査範囲も狭小なことから、埴丘・外堤との関連を追求することができなかった。（大船）

5. ツゲノ遺跡

所 在 地 高槻市水室町 3 丁目地内

調査期間 昭和 56 年 1 月 8 日～14 日

届出理由 府立高校建設

遺構・遺物

当該地は阿武野農業協同組合本店の北側に位置し、高槻市都市計画用途地域の内、市街化調整区域に指定されているところである。昭和 58 年 4 月開校予定の第 141 高槻方面府立高等学校建設工事で、大阪府

教育委員会の要請を受けて遺跡確認調査を実施した。

これまで、当該地周辺には、遺跡として認知すべき遺物等の散布がなく、まったくの空白地帯であった。しかし、調査の結果、ほぼ全域において古墳時代から近世に至る遺構・遺物を検出し、一大複合遺跡であることが判明した。その分布状況は、建設予定地のはば中央に幅約 20 ~ 30 m、深さ 1.2 ~ 2 m を測る谷筋があり、この谷筋を挟んで遺構が並び、とくに東側については、旧広宣寺境内を中心に一辺 7 ~ 10 m を測る方墳群と柱穴を伴う住居群がみられた。また、その南側には竪穴式住居や方形・円形を呈した柱穴群及び溝が検出された。一方、西側には溝状の遺構があり、条里制の遺構を思わせる。

以上の結果を受けて、大阪府教育委員会は 3 次にわたる調査を実施し、貴重な資料を得た。第 1 次調査は昭和 57 年 2 月 1 日 ~ 3 月 31 日、第 2 次調査は昭和 57 年 6 月 1 日 ~ 12 月 25 日、第 3 次調査は昭和 58 年 1 月 28 日 ~ 3 月 31 日である。調査結果は大阪府教育委員会によってすでに調査概報として報告されているので、それらを参照されたい。(富成)

6. ツゲノ遺跡

所在地 高槻市土室町 125 - 1 他

調査面積 331 m²

調査期間 昭和 57 年 6 月 3 日 ~ 8 日

届出理由 道路改修

遺構・遺物

層序は盛土、旧耕土、末土、灰褐色砂質土層、茶灰色土層、地山となる。このうち遺物包含層(厚さ 0.1 ~ 0.2 m)とみられるのは茶灰色土層であるが、今回の調査では遺物の出土はなかった。また遺構も検出されなかった。

所見

立合調査のため明確な遺構を検出できなかったが、遺物包含層の存在から、ツゲノ遺跡の西方への拡がりが認められるようになった。(森田)

7. 岡本山古墓群

所在地 高槻市岡本町字東山

調査面積 50,000 m²

調査期間 昭和 57 年 2 月 2 日 ~ 9 月 30 日

届出理由 宅地造成

遺構・遺物

遺跡は南平台丘陵の南斜面に立地している。以下調査区ごとに概要を記す。

A地区

最も北寄りの調査区で、遺構としては奈良時代の火葬墓 6 基と不定形土壙 2 基がある。

火葬墓はいずれも径 1 m 強の土壙の中に石囲いを設けたもので、そのうち 5 基に蔽骨器が遺存しており、4 基から人骨を検出している。石囲いは人頭大もしくはそれよりもひとまわり大きい石で組まれており、なかには蔽骨器の下にも平石や小石を敷き詰めたものがある。蔽骨器には須恵器(横瓶・杯・壺)、土師器(短頸壺・杯蓋・壺)などが用いられている。なお火葬墓の 1 つから青銅製鉗具が 1 点出土している。

B地区

A地区南東のやや低いところにある調査区で、遺構としては平安時代の木棺墓 2 基・火葬墓 3 基、平安時代末~鎌倉時代の土壙墓 383 基・室町時代の火葬墓 6 基・散骨墓若干があり、他に江戸時代の井戸 1 基・溝 1 条を検出している。

木棺墓 1 は、墓壙長 2.4 m、幅 0.95 m、現存 0.3 m を測り、東西方向に設けられている。墓壙底には切炭と炭粉を雜に敷き込んでいる。木棺は釘の検出状況から、長さ約 2 m、幅約 0.45 m に復元される。棺内からは土師器皿・須恵器水瓶・鉄刀子のほか、石鏡帶一具(青銅製鉗具 1 点、サヌキトイド製丸瓶 6 点、同巡回 4 点、同鉢尾 1 点)を検出している。

火葬墓では須恵器(四耳壺)や灰釉陶器(長頸壺)などを蔽骨器としたものがある。

鎌倉時代の土壙墓は B 地区中央部でまとまって検

出しているが、選地から a 群と b 群に分けられる。各土壤は原則として南北方向に主軸をもち、長さは 1~1.5 m、幅 0.7~1.2 m を測り、おおむね長方形を呈する。墓の構造は墓壇の中に木棺（木棺）を埋置したのち封土し、真上に人頭大ないしそれに倍する程度の川原石を一種の標石としておくのを基本としている。副葬品をもつ土壙墓は全体の約 4% で、種別としては、和鏡・白磁合子・銅錢・鉄刀などがある。

室町時代の古墓には、瓦質土器（鍋・羽釜）を藏骨器とする火葬墓および若干の散骨墓がある。これらの検出位置は一定地域に偏在していて、前代とはあり方が異なっている。

C 地区

B 地区の西方約 100 m のところにある。遺構としては南向きの斜面を幅 25 m、奥行 7 m にわたってテラス状に造成した墓地を検出している。墓地は上下 2 層に分けられ、下層は長方形土壤を主体とする古墓であり、上層は五輪塔を配した形態をとっている。下層の土壤のいくつかには藏骨器（白磁四耳壺・褐釉四耳壺・灰釉四耳壺・同水瓶）を納めたものがある。上層遺構は、下層遺構面に厚さ約 20 cm の盛土をし、その上面を石敷で被覆造成したことろに営まれている。古墓は藏骨器を埋置した真上に五輪塔を設置するのを原則とするが、散骨墓と思われるものもある。五輪塔は現存するものが 13 基、地輪の痕跡を遺すものが 10 余基ある。他に石仏 6 体が出土している。時期は下層遺構が 13 世紀代、上層遺構が 14 世紀代になる。

D 地区

A・B 地区と谷を介した東側の支脈上に位置する。遺構は土壤墓 20 基と火葬墓 1 基がある。土壤墓は鎌倉時代のものと同前である。火葬場は斜面地で検出した。本体になる火葬土壤は縦 1.5 m、横 1 m の長円形で、現存深は 0.25 m を測る。床面は 2 枚認められ、どちらも窓壁状に硬化している。土壤内には棺台と考えられる人頭大の石が据えられていて、鉄釘・骨・炭などが出土している。土壤南端には送風溝

もしくは排水溝と考えられる二又状になった溝がついている。この溝の南側斜面には、縦 6 m・横 9 m にわたって灰原が広がっており、骨片・壁片・釘・土器皿などが出土している。なお土壙付近を精査したが、上屋を復元できるような遺構は検出できなかった。

所 見

調査の結果、岡本山古墓群が古代～中世に至る一大墓地であることが判明した。古代については山上都街との関連が考えられ、青銅製の鉗具を出土した A 地区の火葬墓や B 地区の木棺墓などは、官人墓とみて差し支えないものであろう。中世については、B 地区の集団墓が広範囲にわたって群在することから、集落の共同墓地としての性格がみられるのに対し、C 地区では極めて限定されたところに重層的かつ集約的に造墓されているところから、血縁的紐帶の強い人々の異世墓としての性格が考えられる。

（森田）

8. 岡本山 A 3 号墳

所 在 地 高槻市岡本町字東山

調査面積 100 m²

調査期間 昭和 57 年 9 月 1 日～25 日

届出理由 宅地造成

遺構・遺物

岡本山 A-3 号墳は岡本山古墳群 D 地区内にあり、古墳は支脈南西側の斜面を削り込んで築かれている。墳丘は中世に削平されているものの、土層観察では顯著な封土は認められず、墳形も不明である。なお尾根側で、幅 1.4 m、深さ 0.6 m、現存長 10 m の直線的な溝状遺構が掘切のごとく検出されている。墓壇は 2 基ある。主体となる墓壇は長さ 3.4 m、幅 1.1 m で、ほぼ東西方向に設けてあり、西方向に幅 0.8 m の浅い溝状遺構が付随している。副葬品には短甲 1 頭・鉄鏡 19 本・鉄刀 1 振・盾 1 枚があり、いずれも墓壇の東側に偏って置かれていた。また供獻土器（須恵器・土師器）13 点が墓壇内に落ち込んでいた。須恵器はいずれも初瀬期のもので、編年上貴重な資

料となる。

所 見

岡本山 A 3 号墳の時期は、長方板革縫式短甲や初期須恵器から、5世紀前半と考えられる。また被葬者については、三島地域最大の墓域に営まれているにもかかわらず、その規模は極めて貧弱であり、立地も悪い。反面、副葬品は墳丘規模の割には立派で、すべて武器類であること、とくに盾を含むことから首長に仕えた有力な武人であったことを思わせる。

(森田)

9. 今城塚古墳

所 在 地 高槻市郡家新町

調査面積 90 m²

調査期間 昭和 56 年 11 月 26 日～30 日

届出理由 道路改修

遺構・遺物

当該地は、今城塚古墳の前方部外堤中央北寄りに位置する。調査は届出地の外堤斜面に幅 1 m、長さ約 2～3 m のトレンチを 4ヶ所設けておこなった。トレンチは南側から 1～4 と番号を付した。

トレンチ 1 の層序は、黒色土層（表土）が 0.125～0.25 m の厚さで堆積し、斜面下部ではその下がすぐりに黄褐色粘土層（地山）となる。斜面上部では流土と考えられる黄褐色土層・黄色土層・暗灰色含礫土層が、小プロック状に堆積している。出土遺物は古墳に伴うものはまったく認められず、わずかに流土や表土中から近世の瓦片・磁器片などが出土した。

トレンチ 2 の層序は、黒色土層（表土）が 0.15～0.25 m の厚さで堆積し、トレンチ 1 と同様に、斜面下部で暗黄褐色粘土層（地山）になる。斜面上部では暗黃土色土層が堆積するが流土と考えられる。出土遺物は表土中から瓦片を認めた以外、古墳に伴うものは検出されなかった。

トレンチ 3 の層序は、黒色土層（表土）が 0.15～0.4 m の厚さに堆積し、斜面下半部では黄褐色粘土層（地山）になる。斜面上部は、削平された部分に黄色土層・暗褐色土層の流土が 0.4 m の厚さに堆

積していた。出土遺物は暗褐色土層中より円筒埴輪の細片が 5 点検出されたが、風化度が著しく、外面調整痕などは不明である。

トレンチ 4 の層序は、黒色土層（表土）が 0.15～0.4 m の厚さで堆積し、その下に淡褐色土層（流土）が 0.1～0.5 m の厚さで堆積している。地山は黄褐色粘土層で、その傾斜角度は他のトレンチの状況と比べて小さい。出土遺物は、表土中から多数の瓦片が検出した他、淡褐色土層（流土）中から円筒埴輪片 11 点を検出した。

所 見

今城塚古墳の外堤斜面に 4ヶ所のトレンチを設定して調査を実施したが、遺物の出土状況および層序の堆積状況から、築造当時の外堤斜面はすでに削平されているものと考えられる。各トレンチの地山面の傾斜角度はトレンチ 1 で 34 度、トレンチ 2 で 42.5 度、トレンチ 3 で 28.5 度、トレンチ 4 で 21 度を測り、トレンチ 2 の 42.5 度が築造当時の外堤の傾斜角度に近いものと推測される。（大船）

10. 今城塚古墳

所 在 地 高槻市郡家新町 658-1

調査面積 54.6 m²

調査期間 昭和 59 年 3 月 6 日～8 日

届出理由 水路改修

遺構・遺物

史跡・今城塚古墳、後円部外堤の史跡境界に接する水路である。人力により水路改修部分の掘削を行う。地山は青白色粘土と黄褐色粘土の互層で、水路はすでに地山を削っていた。史跡内への影響はなかった。（富成）

11. 前塚古墳

所 在 地 高槻市岡本町 94-1

調査面積 66 m²

調査期間 昭和 58 年 1 月 31 日

届出理由 仮設事務所建設

遺構・遺物

当該地は前塚古墳南側濠内で、以前より約2mの盛土をおこなっているところである。

仮設プレハブ事務所の建設であるが、その使用期間が6ヶ月という理由から、建物の立界を行つただけである。（富成）

12. 氷室塚古墳

所在地 高槻市氷室町 588-4 他

調査面積 87.25 m²

調査期間 昭和58年6月13日～23日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、埴丘部から北西方約60mに位置し、前方部の濠跡と推定される地点である。調査は届出地の北・南の2ヶ所に、2m角のトレンチを設けて実施した。北側トレンチの層序は盛土(0.1m)、旧耕土(0.1m)、床土(0.1m)、暗灰褐色土層(0.2m)〔遺物包含層〕、黄褐色粘土層(地山)であり、南側トレンチの層序は、旧耕土(0.2m)、床土(0.2m)、暗灰褐色土層(0.2m)〔遺物包含層〕、黄褐色粘土層(地山)である。遺物は南トレンチの包含層から土師器片が数点出土したが、いずれも細片であって、完形に復元できたものはない。所属時期は中世のものと考えられる。

所見

今回の調査区の地層断面を見る限り、調査地は埴丘の外側である可能性が高い。検出した資料が少ないとことから、古墳の範囲などについては、将来の調査に期したい。（大船）

13. 氷室塚古墳

所在地 高槻市氷室町 2丁目 590-10

調査面積 71.76 m²

調査期間 昭和58年8月26日～9月9日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、埴丘部から北西方約50mに位置する。調査は届出地の北西部と中央部の2ヶ所に2m角の

トレンチを設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。両トレンチの基本的な層序は、盛土(0.1m)、旧耕土(0.1m)、整地層(1.5m)、青黄色粘土層(地山)であり、遺物包含層は検出されなかつた。また、調査範囲も狭小なことから、周濠などの遺構もまったく検出することができなかつた。

所見

今回の調査地でも前回と同様に、氷室塚古墳に関連する遺構・遺物は認めることができなかつた。将来、古墳の範囲を明確にするための調査に期したい。（大船）

14. 郡家今城遺跡

所在地 高槻市氷室町 1丁目 781-29

調査面積 100.64 m²

調査期間 昭和56年5月25日～27日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

届出地の東側は奈良時代、平安時代の集落跡で、下層からは旧石器が出土している。盛土(0.65m)、旧耕土(0.2m)、青灰色砂層(0.25)、黄褐色土層(0.2m)と堆積し、地山は黄灰色土である。遺物は須恵器、土師器の細片が若干出土しただけで、どの層からも遺構は確認できなかつた。旧石器の存否を確かめるために、地山以下の調査を実施したが旧石器は発見されなかつた。

所見

郡家今城遺跡の西限の手がかりとなる。（橋本）

15. 郡家今城遺跡

所在地 高槻市氷室町 1丁目 779-9

調査面積 101.64 m²

調査期間 昭和57年6月7日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、府立三島高校の西方約100mに位置し、すぐ西側を女瀬川が南流している。調査は届出地の北西部に2m角のトレンチを設け、遺構の確認と層

序の観察をおこなった。層序は盛土（0.6m）、旧耕土（0.2m）、暗青灰色～暗黄褐色砂質土層（0.3m）、黄褐色粘土～砂質土層（地山）となり、遺物包含層は認められなかった。遺構は北西部で深さ0.3m、深さ0.3mの柱穴1個を検出したが、埋土は灰褐色土層であり、掘り込みも耕土直下であることから、奈良・平安時代よりも比較的新しいものであると考えられる。柱穴からの出土遺物もまったく認めることができなかった。

所 見

今回の調査地は、本遺跡の西端に位置し、遺構の分布が希薄なところである。調査範囲も狭小であって、時期不明の柱穴を検出した以外、集落の拡がりについて新しい資料を得ることができなかった。

（大船）

16. 郡家今城遺跡

所 在 地 高槻市水室町1丁目781-24

調査面積 99.11 m²

調査期間 昭和57年4月12日～24日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、府立三島高校の西方約100mに位置し、本遺跡の西端にある。調査は、届出地の中央部に3m角のトレンチを設け、遺構の確認および層序の観察をおこなった。層序は盛土（0.7m）、旧耕土（0.2m）、床土（0.1m）、黄褐色粘土層（地山）であり、遺構・遺物はまったく認めることができなかった。

所 見

今回の調査地は、本遺跡の西端にあたり、遺構・遺物の分布が希薄なところである。調査区の範囲も狭小であって、遺構・遺物を検出することができなかつたが、将来、付近の大規模な調査に期したい。

（大船）

17. 郡家今城遺跡

所 在 地 高槻市今城町

調査面積 10 m²

調査期間 昭和58年8月8日～12日

届出理由 下水工事

遺構・遺物

当該地は、府立三島高校の南側校舎のすぐ北側に位置する。調査は下水管が埋設される幅0.5m、長さ20mの範囲について、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土（0.4m）、旧耕土（0.1m）、黄褐色粘土層（地山）である。

遺構はトレンチの東側で幅4m、深さ0.4mの浅い南北溝を検出した。埋土は茶褐色土層と灰褐色砂層が互層で4層認められ、溝中から奈良時代に属する須恵器・土師器片を若干検出した。遺物はいずれも細片であって、完形に復元できたものはない。

所 見

今回の調査区は、郡家今城遺跡の住居地のほぼ中央部に位置する。トレンチの東側で検出した溝は、北側校舎を建設する際にも確認されており、住居群を東西に区画するために、さらに南側に延びていると考えられる。（大船）

18. 嶋上郡衙跡

所 在 地 高槻市郡家町977

調査面積 279.49 m²

調査期間 昭和56年4月5日～10日

届出理由 個人住宅改築

遺構・遺物

史跡・嶋上郡衙跡の背後丘陵上で、周辺では弥生時代以後の遺物包含層や柱穴などが検出されている。調査地は第二次大戦中の防空壕でかなり搅乱をうけており、遺構はまったく確認できなかった。遺物は中世の土師器小皿が1点出土したのみである。（橋本）

19. 嶋上郡衙跡

所 在 地 高槻市郡家町751-2

調査面積 440.16 m²

調査期間 昭和56年10月13日～23日

届出理由 住宅建設

遺構・遺物

調査地は史跡・鳴上郡衙跡の後背丘陵の先端部で、弥生時代後期の住居址2棟、溝2条、土壙1基を検出した。

住居址は方形で、幅0.25～0.35m、深さ0.1～0.2mの周溝が確認されたが、1号・2号住居址とも隅部の一部を調査したのみである。いずれも、畿内第Ⅴ様式期の土器が出土した。溝1は、幅約1m、深さ0.3mで中世に属す。溝2は幅約1.5m、深さ0.15mの古墳時代に属す。土壙1は幅約1.5m、深さ0.2mで白磁碗・瓦器などが出土し中世に属す。

所見

郡衙北西部での弥生時代住居址群を推定する手がかりを得た。(橋本)

20. 鳴上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町313-9

調査面積 21 m²

調査期間 昭和56年6月26日～29日

届出理由 給油所増設

遺構・遺物

当該地は史跡指定地北側に隣接するところで、郡衙跡のなかでも遺構・遺物の遺存状態がとくに良好な地域に含まれている。

層序はコンクリート層(0.1m)、整地層(0.1m)、盛土(0.5m)、旧耕土(0.15m)、床土(0.15m)、茶褐色土層(遺物包含層)(0.4m)、黄褐色土層ないし砂礫層(地山)である。遺構は井戸1基とピット4個がある。井戸は円形素掘のもので、上辺径1.4m、現存深0.7mを測る。ピット1は一辺0.7m、現存深0.1mの方形で、柱穴と考えられる。ピット2～4は不整形ないし小規模なものである。遺物は井戸から弥生時代後期の高杯片と奈良時代の須恵器(甕・环片)、ピット1から奈良時代の須恵器・土師器片がある。また包含層からも弥生時代～奈良時代の土器類が出土している。

所見

調査区が狭小なためか、顯著な遺構・遺物は検出されなかった。周辺地域でのこれまでの調査では奈良時代の遺構が多数検出されていて、今回検出した井戸・柱穴についても出土遺物からみて、奈良時代のものと考えられる。(森田)

21. 鳴上郡衙跡

所在地 高槻市川西町1丁目1016他

調査面積 2,797 m²

調査期間 昭和56年7月16日～30日

届出理由 道路改修

遺構・遺物

工事が既破壊部分の横底まで達しなかったため、遺構・遺物は検出できなかった。

所見

特記事項なし。(森田)

22. 鳴上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町464-83

調査面積 58.54 m²

調査期間 昭和56年8月10日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当調査区は鳴上郡衙の西方で、遺構・遺物は比較的希薄な地区である。基礎掘削時に立合いで調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。(大船)

23. 鳴上郡衙跡

所在地 高槻市郡家本町950

調査面積 421.05 m²

調査期間 昭和56年8月10日

届出理由 倉庫建設

遺構・遺物

当調査区は鳴上郡衙の北方にあたる。農業用倉庫の建設が計画されたため、基礎掘削時に立合いで調査を実施した。基礎は現地表から約0.3mを掘削するだけであり、遺構・遺物は検出されなかった。

(橋本)

24. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市川西町 1 丁目 1021-3

調査面積 278 m²

調査期間 昭和 56 年 8 月 24 日～31 日

届出理由 自転車置場建設

遺構・遺物

当該地は、市道辻子一ノ口線と西国街道の交差点から西方約 100 m のところに位置する。調査は、届出地の中央部に東西 3 m、南北 25 m のトレンチを設けて実施した。層序は耕土下に床土は検出されず、その下はすぐに黄褐色砂疊層〔地山〕になる。トレンチの中央部には、暗灰色土層の新しい擾乱層が抜がっており、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。

所見

調査範囲が狭小であるため遺構・遺物を検出することができなかった。すでに調査された隣接地においても、遺物包含層は確認されず遺構の希薄な地域であることが考えられる。(大船)

25. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市清福寺町 9

調査面積 25.99 m²

調査期間 昭和 56 年 8 月 26 日～28 日

届出理由 水道工事

遺構・遺物

当該地は、市立川西小学校より北東方約 200 m に位置する。調査は、水道管の埋設範囲について、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.2 m)、旧耕土(0.2 m)、床土(0.2 m)、暗褐色土層〔遺物包含層〕(0.2 m 以上)であり、その下は調査範囲も限られたことから、掘り下げて地層を確認することができなかった。また、出土遺物については、調査範囲が狭小なこともあって、まったく検出することができなかった。

所見

今回の調査地は、嶋上郡衙跡の東側にあたり、遺構

・遺物の希薄な地域である。調査範囲が狭小なこともあって、遺構・遺物を検出することができなかつたが、遺物包含層の分布がさらに東側に拡がっていることが判明した。(大船)

26. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市清福寺町 13-4

調査面積 115 m²

調査期間 昭和 56 年 9 月 21 日～26 日

届出理由 防火水槽建設

遺構・遺物

防火水槽を埋設する直径 5 m の範囲について調査を実施した。盛土(0.6 m)、灰褐色土層(0.2 m)、暗褐色土層(0.9 m)、淡茶褐色～青灰色砂疊〔地山〕と堆積する。遺構は検出されなかつたが、灰褐色土層から瓦器・土師器・須恵器、弥生式土器が出士した。いずれも細片である。

所見

郡衙跡北側の遺構・遺物の密集するところであるが、調査範囲が狭小なため明確ではなかつた。(橋本)

27. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町 302 他

調査面積 90 m²

調査期間 昭和 56 年 11 月 16 日～22 日

届出理由 水路改修

遺構

当該地は、府道郡家一真上線の南側から史跡境界線までの幅 2 m、長さ 50 m の水路である。基本的な層序は、耕土(0.3 m)、床土(0.1～0.25 m)、暗茶褐色土層〔遺物包含層〕(0.1～0.3 m)、黒色土層〔遺物包含層〕(0.2～0.3 m)、黄褐色粘土～疊層〔地山〕である。

検出した遺構は、弥生時代後期後半の土壙・溝・柱穴と古墳時代後期の土壙・柱穴などがある。特に今回は、調査範囲が南北に細長いこともあって、各遺構の規模などについては不明な点が多い。

遺物

今回の出土遺物は、大部分が黒色土層の遺物包含層と土壤からである。包含層から出土した遺物は、弥生時代後期後半に属する破片が大半であるが、6世紀末までの須恵器・土師器片も少數混入していた。弥生時代後期の土器は、荒いタタキの壺腹片に混って、壺・有孔鉢・高杯などの破片が少量認められる。古墳時代では須恵器の杯身・杯蓋・高杯・細口壺・甕の他に、土師器の高杯・羽釜・把手付壺・甕などがある。その他の遺物としては、包含層と土壤から出土した埴輪片がある。

所見

今回の調査区のすぐ北側では、弥生時代後期の溝・井戸と古墳時代後期の土壤基・建物、奈良時代の建物群が検出されており、それと関係させて今回検出した遺構も考えるべきであるが、調査範囲が狭小なため、将来に期したい。また、すぐ南側の史跡指定地内に位置する芥川寺との関連についても、新たに得られた資料がないため、今後の課題にしたい。

(大船)

28. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市郡家本町 1000-27

調査面積 189.28 m²

調査期間 昭和 56 年 12 月 9 日

届出理由 個人住宅増築

遺構・遺物

当該地は、市立第二中学校の東方約 200 m に位置する。調査は小規模な増築工事のため、コンクリート基礎になる部分についてのみおこなった。層序は暗褐色粘質土層 (0.3 m) で、その下はすぐに黄土色土層 (地山) になり、遺物包含層は認められなかった。また調査地が狭小なこともあって、遺構等もまったく検出することができなかった。

所見

今回の調査地は、本遺跡の北端にあたり、遺構・遺物の分布が希薄なところである。調査範囲が狭小なこともあって、周辺の遺構との関連を追求するこ

とができなかった。(大船)

29. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市川西町 1 丁目 910-7

調査面積 35.53 m²

調査期間 昭和 57 年 1 月 13 日～29 日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は西国街道の北に隣接し、市立川西小学校の東 1 Km の地点にあって、旧山陽道に関連する遺構の検出が期待された。調査の結果、盛土・旧耕土を除去すると青灰色砂礫層となり、芥川の氾濫によって旧地山が削平されていて、遺構は認められなかつた。(富成)

30. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市川西町 1 丁目 1031-1

調査面積 325 m²

調査期間 昭和 57 年 8 月 13 日

届出理由 駐車場建設

遺構・遺物

届出地の中央部に 2 m × 10 m の試掘場を設けたが、遺構・遺物はまったく検出されなかつた。

所見

嶋上郡衙跡関連の遺構は当調査区付近までは拡がっていないことが確認された。(橋本)

31. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市今城町 23-8

調査面積 18 m²

調査期間 昭和 57 年 8 月 19 日

届出理由 広告塔設置

遺構・遺物

広告塔支柱の基礎部分について立合いをしたが、現状の盛土の途中までの掘削であり、遺構・遺物は検出されなかつた。(橋本)

32. 鳴上郡衙跡

所在地 高槻市郡家本町 748

調査面積 87.85 m²

調査期間 昭和 57 年 9 月 13 日

届出理由 倉庫建設

遺構・遺物

当該地は、式内社・阿久刀神社の西方約 200 m に位置する。調査トレンチの位置については、以前の建物基礎をそのまま再利用して倉庫を建てるため、届出地の中央部に設けることができず、南側の境界に接して東西 10 m、南北 1 m のトレンチを設定して実施した。基本的な層序は盛土 (0.4 m)、暗茶褐色土層 (0.2 m)、黄褐色礫層 (地山) である。遺物は茶褐色土層から近世瓦・磁器片が少量出土した他、古い時期の遺物はまったく確認されなかった。また、調査地が狭小なこともあって、地山面上で遺構もまったく検出することができなかった。

所見

今回の調査地は、南側の鳴上郡衙跡と接する位置にあり、遺構・遺物の分布が希薄なところである。今回は調査範囲も限られたことから、遺構・遺物を検出することができなかった。(大船)

33. 鳴上郡衙跡

所在地 高槻市郡家本町 752-1 他

調査面積 726.36 m²

調査期間 昭和 57 年 9 月 15 日～10 月 29 日

届出理由 分譲住宅建設

遺構

当該地は、式内社・阿久刀神社の西方約 150 m に位置する。調査地は、相当厚い盛土がおこなわれているため、重機を使用して盛土を東西に反転しておこなった。西調査区の主な層序は、盛土 (0.2～0.5 m)、暗褐色土層 (0.1～0.8 m) [遺物包含層]、黄褐色礫土層 (地山) である。

西調査区で検出した遺構は、掘立柱建物跡 5 株、溝 1 条と多数の土壤・柱穴等がある。掘立柱建物跡

の多くは、調査区の北側で重複して検出したもので、建物の大部分は調査区域外にあり、規模などについては不明な点が多い。建物跡の主軸方向は、磁北より 20 度西に偏っているもの、磁北より 14 度西に偏っているもの、磁北より 12 度西に偏っているもの、ほぼ磁北のものと 4 通りが認められる。柱穴の掘り方は、一辺 1～1.4 m、深さ 0.6 m を測るものがあり、他の地区で検出した主要建物と比べて、けっして見劣りしない建物群である。

東調査区の主な層序は、盛土 (1.8 m)、旧耕土 (0.2 m)、床土 (0.1 m)、黒褐色土層 (0.1～0.3 m) [遺物包含層]、黄褐色礫土層 [地山] である。検出した遺構は、井戸 1 基と大小多数の柱穴がある。井戸は調査区の北東部で検出したもので、上部径 1.9 m、底部径 1.6 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は黒褐色土層で、底部から石組に使用されたと考えられる人頭大の石が多数出土した。なお、掘立柱建物の配置などについては、調査地の地山面が水田の開墾などによって削平をうけていることと、調査地の範囲が限られたことから、明確にすることはできなかった。

遺物

今回の出土遺物は、遺構の検出状態と調査面積に比べるときわめて少ない。出土遺物を時期別にみると、弥生時代は後期後半の叩き目をもつ特徴的な壺片をはじめ、高杯・壺片などが若干ある。古墳時代は、6 世紀末から 7 世紀中頃にかけてのものが中心で、須恵器の杯身・高杯・壺片などがある。その他、特徴的な遺物として、柱穴から出土した漢式系土器片とフイゴの羽口片がある。歴史時代は、包含層中から出土した須恵器・土師器片が少量ある。時期としては 8 世紀が中心であるが、9 世紀まで下るものも若干含まれている。中世は包含層中から出土した瓦器碗・三足の羽釜・土師器の皿・須恵器の鉢・壺片のほか、磁器片などがある。時期は 14 世紀初頭を中心としたものである。

所見

今回の調査地は、鳴上郡衙跡の北西部にあたり、

南平台丘陵と低位段丘との接点に位置している。当該地周辺部の調査では7~8世紀にかけての掘立柱建物跡がしばしば検出されており、郡衙中心地とは異なる区画をもった住居地域が設定される。また、柱穴から出土したフイゴの破片などから、島上郡衙・芥川廃寺造営時における工人の居住地とも推測される。(大船)

34. 島上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町 291 他

調査面積 800 m²

調査期間 昭和57年11月2日~25日

届出理由 水路改修

遺構・遺物

層序はおむね耕土(0.1m)、床土(0.1m)、暗茶褐色土層(上部包含層)(0.2~0.4m)、黒灰色粘質土層(下部包含層)(0.1~0.3m)、地山である。地山は標高17.5m前後である。遺構は溝3条と方形の柱穴を含む若干のピットがある。溝のなかで2条は芥川廃寺の北辺と目されるところで2.6mの間隔をもって平行に検出されており、寺域を画する機能を有するものかも知れない。溝1は幅1.6m、深さ0.2m、溝2は幅1m、深さ0.2mを測る。ピットは神郡社の近くで集中的に検出しており、中には1辺0.6~0.8mを測る方形の柱穴がみられ、建物跡の存在が考えられる。

遺構に伴う遺物は少ないが、逆に包含層からの出土量は瓦類を筆頭に多く検出されている。土器類では弥生時代後期のものから、古墳時代・奈良時代の土師器・須恵器があり、備前焼の播鉢片や磁器皿・楽焼小皿片なども出土している。瓦類では、白鳳時代~平安時代のものがあり、軒平瓦・丸瓦・平瓦などがみられる。軒平瓦は四重弧文と均整唐草文(平城宮6664L型式類似)があり、丸瓦は玉縁を有するもの37点、行基式のもの3点がある。平瓦は播磨造(186点)と一枚造(11点)に分けられ、前者はさらに凸面の調整や叩きの種類によって5つに細分できる。なお一枚造の中には、「西寺」銘を有する平

瓦が1点出土している。

所見

調査区が狭小なため、端的に寺であることを示す遺構は検出できなかったが、寺域に長大なトレンチを得た結果、地山の起伏を的確におさえることができ、神郡社周辺の限られた地域が周囲と比べて一段高くなっているのが知れた。建物では奈良時代の瓦類が最も多く、白鳳時代の堂宇についてはより南・西に位置していたと考えられる。(森田)

35. 島上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町 499

調査面積 96 m²

調査期間 昭和57年1月17日

届出理由 水路改修

遺構・遺物

水路改修部分について立合調査を実施したが、遺構・遺物はまったく検出されなかった。

所見

島上郡衙の西方への拡がりの限界とみられる。(橋本)

36. 島上郡衙跡

所在地 高槻市川西町1丁目 972-9・10

調査面積 188.38 m²

調査期間 昭和58年6月28日~30日

届出理由 個人住宅建設

遺跡・遺物

当該地は、市立川西小学校の南方約100mに位置し、南側は西国街道(旧山陽道)に面している。調査は南側に東西4m、南北2mのトレンチと北側に東西2m、南北1mのトレンチを設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。両トレンチの基本的な層序は、盛土(0.2m)、旧耕土(0.1m)、黄灰色砂質土層(0.5m)、暗灰色土層(0.05m)、黒灰色粘土層(0.1m)、青灰色砂層(0.3m)、黄灰色砂層(地山)である。

遺構は、南トレンチで検出した土壤1基と、落ち

込み1ヶ所がある。土壤は長さ約1.6m、幅約0.7m、深さ約0.5mを測り、埋土は黒灰色土層であり、出土遺物は認められなかった。遺物は落ち込みおよび黒灰色粘土層から、弥生土器片が若干出土した。時期はいずれも後期後半に属するものばかりである。

所見

今回の調査区から、山陽道と考えられる石敷・側溝などまったく検出されなかった。西トレントの調査結果から山陽道の位置を推測すると、当該地よりも、もう少し北側に寄っているものと考えられる。(大船)

37. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市川西町1丁目1086-13

調査面積 76.13 m²

調査期間 昭和58年7月12日～13日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、市立川西小学校の南方約200mに位置し、本遺跡の南端にあたる。調査は届出地の中央部に2m角のトレントを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(1m)、旧耕土(0.2m)、青灰色粘土層(0.2m)、暗灰色粘土層(0.1m)、黒灰色粘土層(0.3m)、灰色礫土層(地山)となり、調査区内では遺物包含層は認めることができなかった。また、調査範囲が狭小なこともあって、遺構なども検出することができなかった。

所見

今回の調査地は、本遺跡の南端に位置し、遺構・遺物の分布が希薄な地域である。今回の調査範囲は狭小であって、遺構・遺物を検出することができなかつた。(大船)

38. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市川西町953-2

調査面積 104.21 m²

調査期間 昭和58年7月13日～16日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、市立川西小学校の東方約100mに位置し、本遺跡の東端にあたる。調査は届出地の中央部に東西2m、南北4mのトレントを設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.9m)、旧耕土(0.3m)、青灰色粘土層(0.1m)、暗黃褐色粘土層(0.4m)、暗灰褐色粘土層(0.6m)、暗黒色粘土層(0.3m以上)であるが、トレントが深くなりすぎて危険なため、地山を検出することができなかった。遺物包含層は暗灰褐色粘土層と暗黒色粘土層の2層であるが、出土遺物が少なく、形成時期については明確でない。遺物は暗黒色粘土層中から弥生土器・土師器片が数点出土したが、いずれも細片であって、器種等については不明である。

所見

今回の調査地は、本遺跡の東端に形成された方形周溝墓群のさらに東側に位置することから、これまで遺構・遺物の分布が希薄な地域と考えられていた。しかし、今回の調査結果などによって、遺跡の範囲はこれより東方に拡がることは確実であり、さらに東辺部の調査が望まれる。(大船)

39. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町237

調査面積 261.34 m²

調査期間 昭和58年8月24日～25日

届出理由 倉庫建設

遺構・遺物

旧西国街道のすぐ南側である。3m×5mの試掘場を設けたが、遺構・遺物はまったく検出されなかつた。

所見

旧西国街道南側では、郡衙関連遺構が希薄であることがわかる。(橋本)

40. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市清福寺町915-4

調査面積 144.06 m²

調査期間 昭和 58 年 8 月 29 日～9 月 2 日

届出理由 個人住宅改築

遺構・遺物

川西小学校正門のすぐ東側である。2.5 m × 3.5 m の調査溝を設けたところ、溝状落ち込みの肩部を検出した。深さ 0.4 m で性格は不明である。内部から古墳時代とみられる土師器細片が出土している。

所 見

周辺は郡衙成立に先立つ弥生・古墳時代の遺物が数多く検出されているが、今回もその一部が検出されたが調査区が狭小なこともあり遺構の性格は不明である。(横木)

41. 鳥上郡衙跡

所在 地 高槻市清福寺町 890 他

調査面積 2,607 m²

調査期間 昭和 58 年 10 月 3 日～12 月 27 日

届出理由 事務所兼倉庫建設

遺構・遺物

式内社・阿久刀神社のすぐ南側である。弥生・古墳・平安時代の遺構・遺物が数多く検出された。

弥生時代の遺構は不定形の土壙墓 27 基、壇塚墓 2 基、溝である。壇塚墓は第Ⅳ様式期であるが、他は中期とみられるが詳細な時期は不明である。

古墳時代の遺構は竪穴式住居 17 棟と掘立柱建物 1 棟、溝である。竪穴式住居はいずれも方形で、内部から第Ⅴ様式土器と庄内・布留式土器が伴出しているものが多い。6 棟の竪穴式住居の南壁に沿って一辺數十 cm の方形あるいは不定形の土壙が検出された。また 1 棟の竪穴式住居の一辺の側壁に沿ってベッド状遺構が検出された。

掘立柱建物は 3 間 × 3 間である。溝は幅 1.5 m 、深さ 0.5 ～ 0.6 m のしっかりとした溝である。平安時代の遺構は井戸 3 基と小ビット群である。井戸は素掘りと石組みの両方がある。遺物は各竪穴式住居から多量の弥生第Ⅴ様式土器・庄内・布留式併行期の土器が出土している。また、井戸や包含層から瓦器・黒色土器・土師器なども出土している。

所 見

周辺のこれまでの調査でも数多くの弥生・古墳時代の竪穴式住居が検出されているが、今回検出された住居址群と合わせて、弥生後期～古墳時代前期の大集落が形成されていたことがわかった。ベッド状遺構など、竪穴式住居内部の構造について知る手がかりを得ることができた。(横木)

42. 鳥上郡衙跡

所 在 地 高槻市清福寺町 915-5

調査面積 155.46 m²

調査期間 昭和 58 年 10 月 31 日～11 月 2 日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、市立川西小学校の北東方約 100 m に位置する。調査は届出地の中央部に 3 m 角のトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土 (0.5 m) 、旧耕土 (0.1 m) 、暗灰色砂層 (0.1 m) 、暗灰色粘土層 (0.1 m) 、暗褐色土層 (0.2 m) [遺物包含層] 、暗黄褐色土層 (地山) である。

検出した遺構は、溝 1 条と柱穴 4 個である。溝は調査区の中央部で検出し、幅 0.7 m 、深さ 0.1 m を測る。埋土は暗褐色土層で、遺物は認められなかった。柱穴は直徑 0.2 ～ 0.7 m 、深さ約 0.05 ～ 0.2 m を測る。時期については、出土遺物が認められないため明確でないが、埋土の色調などから柱穴群の方が新しいものと考えられる。遺物は暗褐色土層から、弥生時代後期の壺・甕片が少数出土したが、いずれも細片であって、完形に復元できたものはない。

所 見

調査区の南側一帯は、弥生時代中期には多数の方形周溝墓群と土壙墓群が検出される巨大な墓域である。しかし、後期以降になると墓域から居住地域にならしく、多くの竪穴式住居が重複して検出されている。今回の調査地は、調査範囲も狭小で検出した遺構も明確でないが、溝は方形周溝墓の一部と推定され、柱穴群は後期の住居群に関連するもの

であろう。（大船）

43. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町

調査面積 414.9 m²

調査期間 昭和 58 年 11 月 15 日～26 日

届出理由 水路改修

遺構・遺物

当該地は、芥川廃寺の南方約 100 m に位置する東西水路である。今回、改修工事が実施された範囲は約 150 m で、東側の約 70 m は史跡境界線と北側で接している。調査区の基本的な層序は、耕土（0.2 m）、床土（0.2 m）、黒色土層（0.4 m）〔遺物包含層〕、青灰色～茶褐色粘土層（地山）である。

遺物は芥川廃寺に近接することから、多量の瓦類の出土が予測されたが、意に反して出土量はコンテンタ半分程度である。しかも遺物の大部分は、水路の中央部で検出した幅約 20 m、深さ約 0.3 m の自然の流路内からである。出土遺物は、旧石器時代のサヌカイト製剝片、弥生時代後期の土器片、古墳時代の須恵器・土師器片と芥川廃寺の瓦片など、各時代のものが若干ある。

遺構は調査範囲が限られたことによって、人工的なものはまったく認められず、自然の流路を 2 ～ 3ヶ所で検出ただけである。

所見

芥川廃寺の史跡指定地より西側一帯は、これまでの試掘調査などによって、遺構の分布が希薄な地域であると考えられていた。今回の調査においても、まったく人為的な遺構を検出することができなかつたが、嶋上郡衙周辺の遺構のあり方を考える上で貴重な成果である。（大船）

44. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市川西町 1 丁目 1026-3

調査面積 954 m²

調査期間 昭和 59 年 2 月 2 日～3 日

届出理由 駐車場建設

遺構・遺物

調査は 4 m 四方のトレンチを設けておこなった。

層序は盛土・旧耕土・床土・灰褐色土層（地山）で、遺構・遺物の類はまったく検出できなかった。

所見

本調査区の西側には川西古墳群があり、その辺りを追求したが、それに該当すべき資料は検出されなかった。川西古墳群は後世に削平されている遺構であることから、遺物量が極めて少なく、包含層もあまりみられないもので、今後周辺地域での範囲確認調査が期される。（森田）

45. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市郡家新町 341 他

調査面積 215 m²

調査期間 昭和 59 年 2 月 9 日～3 月 15 日

届出理由 農道改修

遺構・遺物

当該地は史跡・嶋上郡衙跡附寺跡の西南にあたり、東西 150 m の狭長なトレンチを設けて調査を行なった。

基本的な層序は盛土・耕土・床土・茶褐色土層〔遺物包含層〕・地山であるが、中央部で谷状に凹んだところは包含層ではなく、暗灰色砂質土や灰色砂層が堆積している。遺構は東端部で 1 辻 0.6 m を測る方形ピットを 1 個検出しているのみで、他に顕著なものはない。遺物は包含層から芥川廃寺の唐草文軒平瓦・平瓦をはじめ、天目茶碗・須恵器壺・壺の各破片が若干出土している。

所見

トレンチ中央部で検出した谷筋は、北にある芥川廃寺の西辺、大きくは郡家川西遺跡の西辺を限るものと考えられる。（森田）

46. 嶋上郡衙跡

所在地 高槻市清福寺町 915-13

調査面積 184 m²

調査期間 昭和 59 年 3 月 12 日～21 日

届出理由 個人住宅改築

遺構・遺物

当該地は史跡指定地東側にあたり、調査は $2\text{m} \times 4\text{m}$ のトレーナーを設けておこなった。

層序は盛土・旧耕土・灰褐色砂質土層・淡茶灰色砂質土層・暗茶褐色土層〔遺物包含層〕・地山となる。遺構は落ち込み2ヶ所とピット1個がある。遺物は包含層から弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器片が出土しているが、顯著なものはない。

所見

調査区が狭小なため明確な遺構はつかめなかったが、東南部で検出した落ち込みは住居址になる可能性がある。また、包含層は良好なわりに遺物の出土量が少なかった。(森田)

47. 尼ヶ谷・唐井谷古墳群

所在地 高槻市南平台5丁目118-1 他

調査面積 1,500 m²

調査期間 昭和57年11月22日～昭和58年5月6日

届出理由 宅地造成工事

位置と環境

高槻市の北西部、南平台丘陵上に位置する弁天山古墳群から東へ派生する支丘陵上に尼ヶ谷古墳群と唐井谷古墳群がある。この両古墳群は5世紀前半～6世紀後半に至る長期にわたって造営され、しかも、円墳・方墳がその主流をなす。現状はゴルフ場造成によって、そのほとんどは旧状をとどめていない。また、同丘陵の東辺に沿って南流する芥川が丘陵端を削りとったため、切り立った断崖状を形成している。周辺には大藏司遺跡・宮ノ川原遺跡や弁天山古墳群・墓谷古墳群などがある。

(I) 尼ヶ谷古墳群

① 尼ヶ谷A-1号墳

弁天山C-1号墳が立地する丘陵より伸びる支丘陵上に位置する。当該地は元ゴルフ場に隣接する山林内にあって南には大きく開削された谷によって墳丘の一部が崩壊していた。

規模は直径17m、みかけの直径20mを測る円墳

である。西から続く尾根を切断する濠は幅2.5m、深さ約1.1mで、墳丘裾から約1m幅で葺石が遺存している。葺石は人頭大のものから拳大のものまであり、部分的に二重の葺き方をしている。遺存する葺石は約2,924個で重さ4,834.5kgを測る。その中央部に2基の割竹形木棺、その東に木棺墓、西に埴輪棺の計4基の埋葬施設と濠内に1基の壺棺をはさんで南と北に各1基の木棺墓がある。

割竹形木棺はほぼ東西方向にある。第1主体部は長さ5.8m、幅1.6m、深さ0.35mの墓壙に、長さ4.15m、幅0.5～0.6mの割竹形木棺を納め、その周囲に拳大の河原石をもたせかけるように置き、西側小口の西南端より墳丘肩にまで長さ4.7mの排水溝を設けている。頭位は東にあって棺内はベンガラ朱が塗布されている。副葬品はない。

第2主体部は第1主体部の長軸に対し約3°北へ振る。規模は長さ4.3m、幅0.8～0.7mを測り、頭位は西にある。棺内中央部から西側小口にかけてベンガラ朱を認める。副葬品は棺のはば中央で鉄鐵1本を検出した。但し、状況から推してこれが副葬品かどうか疑問である。排水溝はない。

第3主体部は、第2主体部の西にあって方位は南北方向にある。幅0.7m、長さ1.3mの墓壙に朝顔形埴輪のU縁部と底部を打欠いたものに楕円形埴輪を使って両端を塞いだものである。

第4主体部は第1・2主体部の東、約2mのところに位置し、主軸は南北方向にあって組合せ式木棺である。長さ2.2m、幅1mの墓壙に、長さ1.8m、幅0.45mの木棺を納める。墓壙底にはベンガラ朱を認める。

第1主体部の長軸延長線上の濠内に壺棺墓がある。直径0.5m、深さ約0.3mの墓壙に器高37cm、最大腹径30.7cmの二重U縁を有した壺形土器が口縁を北上方位にして埋置され、腹部に煤の付着した壺腹片を蓋として利用している。この壺棺墓を中心、南と北に2基の木棺墓がある。南へ4mの位置にある木棺墓は長さ1.3m、幅0.8mで木口にあたるところには幅0.13m、長さ0.4mの掘り込みが認められ

る。他の1つは北へ6mの位置にある。長さ1.65m、幅0.5~0.4mで頭位は南にある。

② 尼ヶ谷B支群

尼ヶ谷B支群は、尼ヶ谷A-1号墳の北方、谷をへだててあり、芥川へ突出した支丘陵の頂部に位置すると考えられる。この頂部は標高51mで、芥川との比高差は約25mを測る。同支群はゴルフ場造成或時に削平あるいは盛土されていて、すでに削減したものもあると考えられる。

現存する古墳は10基を数え、その造営年代は長く、5世紀中頃から7世紀中頃にかけて断次築造されている。B-1・B-5号墳は5世紀中頃から後半の時期である。B-1号墳の規模は一辺約11mの方墳で、幅1.2mの濠をめぐらす。B-5号墳は一辺約10mの方墳で、幅1.6mの濠をめぐらす。B-1号墳の東濠内には人為的に破壊された須恵器（壺1・罐1・甕1）と土師器（大形高杯1・橢形高杯7個体以上）を検出した。須恵器、土師器は共に一群をなし、混在しない。B-5号墳の西濠内には埴輪片が散在する。

5世紀後半に属する古墳はB-7・8・9・10の4基がある。B-7号墳は東西3.5m、南北4mを測り、その中央に長軸を南北方向に配した木棺墓がある。幅0.8m、長さ2.5m、深さ0.2mの墓壙に長さ2.2m、幅0.55~0.5mの木棺が埋置されていた。頭位は北にあって、棺内の足辺中央に刀子1本を検出している。棺外で、西側板北寄りに鉄鏃1本を検出した。なお、遺存する盛土より土師器片を検出している。墳丘外では東濠底に2組の蓋片が出土している。1組はセッテで、他は破片である。

B-8・9号墳はそれぞれ幅1m、深さ0.7m、幅1.5m、深さ0.5mの濠を認めるものの規模は不明である。B-10号墳は幅1m、深さ0.3mを測る濠に平行して幅1.4m、長さ2m、深さ0.5mの墓壙を検出している。

次に6世紀後半に築造されたB-2号墳は横穴式石室を有する円墳である。直径8mの墳丘の中央に石室を構築するが、人半は芥川の侵蝕による崩壊が

著しく規模は明らかでない。遺存する玄室内は人頭人の河原石で敷石とし、中央に幅0.3mの排水溝を設けている。遺物は須恵器（环身・高杯脚部各1）、鉄斧1、鐵鏃6、金環1、である。墳丘北濠内から土葬時に廻棄されたと考えられる須恵器（広口壺・甕）、土師器（甕）が出土している。

次に7世紀中頃に属する古墳はB-3・4号墳の2基がある。B-3号墳は直径5mの円墳で、中央に長さ2.2m、幅1.4mの墓壙に、長さ1.3m、幅0.5mの竪穴式石室を築き、床面には0.04mの小石を一面に敷きつめ、その上に細長い河原石でもって棺台としている。天井石はすでにない。遺物は石室のほぼ中央北側壁寄りに銅鏡1個を検出した。銅鏡は直径1.8cmで頂部に紐穴を設ける。材の厚みは1.2mmで、玉は石片である。B-4号墳は直径約5mの円墳で墳丘のはとんどが削平されている。濠内には須恵器（杯・壺）と土師器片が出土している。

その他、火葬墓2基を検出している。1つは長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.1mで壁面及び埋土に焼土が認められる。他は一辺0.8mの方形を呈する。床面及び埋土中に土師器片を認める。また床面より浮いた状態で河原石2個を認めた。これらは南平台丘陵の南端部に発見された岡本山古墓群のそれと同じもので、13世紀代のものであろう。

[II] 唐井谷古墳群

尼ヶ谷B支群から北方約160mに位置する。支丘陵の北は大きく開口する谷があり、東方に宮ノ川原遺跡が望める。旧地形からみて、西の墓谷古墳群から続く支丘陵にあたる。

比較的広い平坦面をもつ丘頂には昭和52年2月、丘陵南縁辺に位置する竹敷内から平安時代の成骨器が発見されている。古墳はこの丘陵の北縁辺に5基が並んでいる。5世紀後半と思われる。B-1・4号墳は共に方墳である。B-1号墳はその全容は明らかでない。B-4号墳はB-1号墳の西にあって、幅1.6m、深さ0.6mの南側濠の一部を認めるに過ぎない。両墳共、埴輪片が出土しているが、B-4号墳のそれには動物を表現した形象埴輪と若干の須

恵器片がある。

次に6世紀末から7世紀にかけて造墓されたものにB-2・3・5号墳がある。B-2号墳は一辺5mを測る方墳で、幅0.6m、深さ0.2mを測る堀がある。B-3号墳は横穴式石室を有する円墳かと思われるが、大半が削平を受けている。B-5号墳の西にあって花崗岩が散在するのみである。周辺に須恵器片を認めるものの遺構はすでに削平を受けている。

その他、ナイフ型石器と有舌尖頭器各1点が出土している。ナイフ型石器はB-4号墳の墳丘地山中に斜め下方の状態で出土している。有舌尖頭器は尼ヶ谷B支群、B-7号墳東濠内から出土した。この石器はこの丘陵西側の皇子塚遺跡から出土したものと同様の大きさ(約5cm)であるが、石材はチャート製である。

所見

今回の尼ヶ谷・唐井谷両古墳群の調査では、15基の古墳と4基の火葬墓を発見している。

調査の結果から新たに派生した問題は両古墳群共に方墳を主体とした群構成をなし、墓域設定時期についても同じ時期頃と考えられること、尼ヶ谷A-1号墳の出現以後あまり時間的間隔をおかずして造墓する仕様とその構成状況は松尾川流域に出現する紅葉山古墳群と相似すること、尼ヶ谷A-1号墳第3主体に使用された朝顔形埴輪並びに精円形埴輪と第1・2主体及び濠内出土の二重口縁を有した臺形土器との関係。一方、両古墳群造墓期間が著しく長いことを示す尼ヶ谷B-3号墳の造墓形体のこと、そして弁天山・墓谷両古墳群との関係である。以上、列記した点について今後の整理結果に期することであろう。また、今回の調査で明らかになった最大の点は、東を流れる芥川の流路変化が明らかになつたことである。尼ヶ谷B支群並びに唐井谷B支群で検出した土壙墓、いわゆる火葬墓と両古墳群の墳丘崩壊とが現地形とは無関係の選地状況を示していく。中世以後大規模な地形変化があったことを考慮する必要性が明らかとなった。これは東側の低地に営ま

れた大藏司遺跡や宮ノ川原遺跡のこれまでの調査結果からみて、芥川が規模の大小はあっても氾濫が繰返されたため、人為的に南平台丘陵に沿って流れるよう変化されたため、丘陵の表層土が削られ、現在みる地形が形成されたものであろうと考えられる。しかし両古墳群の規模を考えれば、相当数の古墳が造営されたとみるに不自然ではない。今後の整理作業と周辺調査の進行との中で両古墳群の全様が明らかとなるであろう。(富成)

48. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町4丁目3070

調査面積 36.24 m²

調査期間 昭和56年6月1日～3日

届出理由 寺院(写経堂)建設

遺構・遺物

明徳元年(1390)創建の臨濟宗普門寺石庭の南側にある。届出地の中央部に4m×2mの調査坑を設けたが、表土(0.25m)、黄褐色土(0.3m)と堆積し、すぐ地山が検出された。遺構はまったく確認できず、備前、信楽の破片が若干出土したのみである。

所見

周辺では弥生～中世の遺構・遺物が多量に検出されているが、当該地では普門寺建設に際し、かなり削平されているようである。(橋本)

49. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町6丁目2541

調査面積 256 m²

調査期間 昭和56年6月4日～6日

届出理由 個人住宅改築

遺構・遺物

普門寺・三輪神社の南側である。3m×2mの調査坑を設けた。約0.2mの盛土で0.1mの褐色土が堆積し、これを除去すると岩盤状の黄褐色地山となる。遺構は確認できず、土師器小皿の小破片が若干出土したのみである。

所見

富田丘陵の南側斜面にかけて、中世以降の遺物包含層が拡がっていることがわかった。(橋本)

50. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町 6 丁目 2525 の 3

調査面積 137.62 m²

調査期間 昭和 56 年 9 月 16 日～17 日

届出理由 個人住宅改築

遺構・遺物

富田丘陵の南側斜面である。以前は南側へ谷状に低くなっていたとのことで、盛土を除去すると、最近の瓦を含む褐色土が約 1.3 m 堆積していた。遺構・遺物は確認できなかった。

所見

旧地形を復元する手がかりを得たが、遺構の拡がりは確かめられなかった。(橋本)

51. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町 4 丁目 2491-2

調査面積 107.08 m²

調査期間 昭和 56 年 10 月 9 日～30 日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、普門寺の北東約 80 m に位置し、富田遺跡のいちばん北側にあたる。調査は届出地の中央部に 3 m 角のトレンチを設け、遺構・遺物の確認をおこなった。層序は表土 (0.2 m)、黄褐色砂礫層 (0.5 m)、暗青灰色土層 (0.2 m)、黄褐色砂礫層 (地山) である。今回の調査では、遺構・遺物は検出することができなかった。

所見

今回の調査地は、東側に開けた谷合となつたところであり、堆積土の状況から推測すると、近世以降に埋め立てがおこなわれ、比較的新しい時期に宅地化したことが考えられる。(大船)

52. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町 3 丁目 2768

調査面積 352.54 m²

調査期間 昭和 57 年 1 月 12 日

届出理由 個人住宅改築

遺構・遺物

届出地の 2 箇所に 1 m 四方の調査壙を設けた。約 0.1 m の盛土を除去すると、すぐに岩盤状の黄褐色土となる。部分的にレンズ状の黒色土の落ち込みがみられる。盛土中に室町時代の備前焼擂鉢破片が混入していた。

所見

富田丘陵の南西部に遺構が拡がっていることが確認できた。(橋本)

53. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町 6 丁目 2728

調査面積 237.49 m²

調査期間 昭和 57 年 9 月 8 日～14 日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、普門寺の南方約 170 m に位置する。調査は届出地の中央部と東南部に 2 m 角のトレンチを 2 ケ所設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。中央部トレンチの層序は、暗褐色土層 (0.3～0.5 m)、黄褐色砂礫層 (地山) であり、地山面では搅乱による凹凸が著しく認められた。東南部トレンチの層序は、灰褐色土層 (0.1 m)、黒色土層 (0.15 m)、黄褐色砂礫層 (地山) となる。地山面の搅乱は認められなかった。遺物は中央部のトレンチの暗褐色土層から、多量の近世瓦・磁器・陶器片を検出したが、その他の遺物は認められなかった。

所見

今回の調査地は、遺跡の中心地に近い場所にもかかわらず、遺構はまったく検出することができなかつた。調査地の地形は、小さな南向きの谷になつてあり、ちょうど西斜面中腹部に位置することから、

古い宅地造成によって地山面が削平され、遺構が消滅した可能性が高い。(大船)

54. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町 6 丁目 2832-1

調査面積 352.9356 m²

調査期間 昭和 58 年 2 月 14 日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

届出地の中央部に 3 m × 3 m の試掘場を設けたが、遺構・遺物はまったく検出されなかった。

所 見

富田丘陵の南側斜面であり、付近では遺物包含層などがみられるが、当調査区ではかなり削平されているようである。(橋本)

55. 富田遺跡

所在地 高槻市富田町 4 丁目 2518

調査面積 399.2 m²

調査期間 昭和 58 年 11 月 10 日

届出理由 倉庫建設

遺構・遺物

当該地は、普門寺の南方約 50 m に位置し、昭和 51 年夏に調査をおこなった旧富田小学校跡地とすぐ北側で接している。調査は届出地中央部に 3 m 角のトレンチを設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土 (0.2 m) 、黄灰色土層 (0.2 m) 、暗灰色粘土層 (0.6 m) 、暗黃緑色礫土層 (地山) である。遺物は暗灰色粘土層から近世の陶磁器片数点と瓦片を若干検出したのみである。また、調査範囲も狭小であって、遺構はまったく検出することができなかった。

所 見

今回の調査地は、富田遺跡のはば中央部に位置することから、居住地域に伴う遺構の検出が当然予測された。しかし、後世の擾乱が調査区では広範囲にわたって著しくおこなわれており、遺構・遺物の検出はまったく望めない状況を呈していた。(大船)

56. 教行寺跡

所在地 高槻市富田町 6 丁目 2667

調査面積 995 m²

調査期間 昭和 56 年 9 月 1 日～10 月 8 日

届出理由 病院建設

遺構・遺物

14 m × 16 m² の範囲が調査できたが、地山 (黄褐色土) は南東部に下降する。地山上に 2 基の方形周溝墓を検出したが、1 号周溝墓は一辺約 7 m である。2 号周溝墓の規模は不明である。時期は弥生第Ⅳ 様式期である。地山上に弥生第Ⅳ 様式土器を含む包含層が堆積し、その上部で建物群としてのまとまりを欠いているが平安時代から中世にかけての柱穴などを検出した。この柱穴群の上部に焼土を含む淡褐色土、灰褐色土が 0.6 ～ 0.7 m の厚さで堆積していた。

所 見

隣接する教行寺本堂の調査とあわせて、天文元年 (1532) に細川晴元に焼かれた中世の教行寺の一帯を調査できたが、記録にあるとおり焼土を含む土層も確認できた。真宗教団の北浜布教の中心であった教行寺関連の遺構が周辺にはまだ多く残っているものとみられる。また、富田丘陵南側斜面は弥生時代以降、遺跡が連続として続くことが裏づけられた。(橋本)

57. 中城遺跡

所在地 高槻市昭和台 2 丁目 25-1

調査面積 41.4 m²

調査期間 昭和 58 年 5 月 13 日～30 日

届出理由 寺院 (庫裡) 増築

遺構・遺物

当該地は、慶瑞寺の南東部に位置する。調査は届出地の面積が狭小なことから、2 m 角のトレンチを南北と北の 2ヶ所に設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。北側トレンチの層序は盛土 (0.5 m) 、暗褐色土層 (0.1 m) [遺物包含層] 、黄褐色礫土層 (地山) であり、南側トレンチの層序は盛土 (0.5

m)、黄褐色礫土層〔地山〕である。

遺構は調査区が狭小なことによって、まったく認めることができなかった。出土遺物は非常に少なく、北側トレンチから検出した土師器の杯片が若干ある。いずれも細片で、完形に復元することができなかつたが、径10cm程度のものと思われる。所属時期については胎土などから中世のものと考えられる。

所見

中城遺跡はこれまで数回の調査がおこなわれてきただが、いずれも小規模な開発に伴うものであって、明確な遺構を検出したことはない。しかし、遺物包含層からは、弥生土器片から中世の陶器片まで各時代のものが混って出土し、相当長期間にわたって営まれた集落址であったことが推定される。(大船)

58. 塚脇古墳群(C-6、C-7、E-1号墳)

所在地 高槻市大字原1-3他

調査面積 106,600 m²

調査期間 昭和56年4月6日～8月1日

届出理由 宅地造成

当該地は、蒂仕山の東斜面に位置し、今回、大規模な宅地造成が計画されたため、予定地に立地する3基の古墳について、事前に発掘調査を実施したものである。

C-6号墳

遺構

本古墳は、蒂仕山の東斜面の中腹部に位置し、標高は102mを測る。墳丘の形状は円墳で、直径11m、高さは南側で約2.2mを測り、西・北側に浅い周濠を有する。内部主体は、玄室に特徴的な刺張りがある右片袖の横穴式石室である。石室の規模は、玄室幅1~1.5m、玄室長2.75m、羨道長3.2mを測り、石室の中心軸は西に33度偏っている。玄室内には、挙大の河原石がほぼ全面にわたって散きつめられ、羨道部には人頭大の山石が閉塞石として、20数個が置かれていた。

遺物

石室内から出土した遺物は、須恵器の杯蓋2点、杯身4点、脚付直口壺1点、同蓋1点、縁1点と鉄釘3点である。その他、石室の前庭部および周濠からは、破損した須恵器片が多数出土した。出土した遺物の大部分は小さな破片であって、完形品に復元できたものは少ないが、器種としては、蓋杯・提瓶・広口壺・直口壺・同蓋・甕などがある。

C-7号墳

遺構

本古墳は、C-6号墳の北西方約50mに位置し、標高は120mを測る。墳丘の形状は円墳で、直径約9.5m、高さは南側で約2.5mを測り、西・北側に周濠を有する。内部主体は、比較的大きな角礫を使用した無袖の横穴式石室である。石室の規模は幅1m、長さ4.7mを測り、石室の中心軸は西に36度偏っている。石室の石敷は、扁平な山石を全体に集中することなく配置し、羨道閉塞石は、人頭大の角礫を10数個使用していた。

遺物

石室内から出土した遺物は、須恵器の蓋4点、碗1点、杯身1点と土師器の椀1点と金環1点、鉄釘30点である。その他、石室の前庭部および周濠からは、石室から抜き出された多数の須恵器片と鉄釘2点を検出した。須恵器の器種としては、蓋杯・無蓋高杯・小型壺・長頸壺・甕などがある。

E-1号墳

遺構

本古墳は、蒂仕山の東斜面に位置し、標高は124mを測る。墳丘の形状は円墳であり、直径13.5m、高さ3mを測り、西側に周濠を有する。内部主体は、細長い左片袖の横穴式石室である。石室の遺存状態は、西側壁が全体にわたって石室内に崩れ落ちたため、その衝撃によって東側壁も少し外側に傾いた状態を呈している。石室の規模は、玄室幅1.1m、玄室長4.3m、羨道幅0.9m、羨道長3.3mを測り、今回調査した3基の古墳の中では最大である。石室の中心軸は、東に14度偏っている。床面には、挙大の亜角礫を利用した石敷が羨道閉塞石まではば全面

にわたって敷かれ、美濃部には10数個の大・小の山石を閉塞石として置いていた。

遺物

石室内から出土した遺物は、須恵器の杯蓋1点、杯身2点、無蓋高杯1点と金環・刀の輪・刀子・鉄釘・鉄櫛が各1点である。その他、石室の前庭部および周濠からは、破損した須恵器片が多数出土した。出土した須恵器片の大部分は大甕片であって、2個体に復元することができた。その他の器種としては、杯蓋・広口壺・脚付直口壺・無蓋高杯などがある。

所見

今回調査した3基の古墳は、塚脇古墳群の中でも東斜面に形成されたグループに属し、南斜面に立地する古墳と比べて、非常に急斜面の条件の悪い所に造られている。調査した古墳の石室は、いずれも天井石を残さない状態まで破壊されたものであったが、石室内の副葬品は良く遺存していた。この副葬品から、これらの古墳は6世紀後半から7世紀前半にかけて、造られたことが推測される。(大船)

59. 塚脇古墳群

所在地 高槻市黄金の里1丁目2-54

調査面積 286.65 m²

調査期間 昭和56年5月27日~28日

届出理由 宅地造成

遺構・遺物

当該地は、帶仕山の南斜面中腹部に位置する。調査は古墳と推測される場所に、2本のトレンチを設けて地層断面の観察をおこなった。層序は表土層(0.1m)で、その下はすぐに黄褐色土層(地山)になり、遺構・遺物は検出されなかった。

所見

調査地は、塚脇古墳群の中央部にあたるが、新たな古墳の発見は認められなかった。(大船)

60. 塚脇古墳群(D-1号墳)

所在地 高槻市大字原1-3-33他

調査面積 300 m²

調査期間 昭和56年7月6日~25日

届出理由 宅地造成

遺構

当古墳は帶仕山の頂上に位置し、標高192mを測る。古墳の形状は方墳で、一辺5m、高さ0.4mを測り、周囲に浅い空濠をめぐらしている。内部主体は、無袖の小型横穴式石室である。石材は天井石のみが大きな山石を使用しているが、他はすべて芥川から運び上げた河原石である。石室の規模は幅0.8m、長さ2.7mを測り、石室の中心軸は東に14度偏っている。

石室内の遺物の出土状態は、奥壁の西寄りに土師器の杯1点が出土し、中央部南北寄りに須恵器の蓋杯5点がまとめて出土した。また床面上には、棺台と考えられる跡が数点認められた他、石室入口部では、挙大の甕10数個が石室の内外を区画するように置かれていた。

石室の墓壙は、東西辺2.2m、南北辺3.4m、深さ0.3~0.4mを測り、墓壙の南側には幅0.8~1.1m、深さ0.1~0.3m、長さ5mの排水溝が掘られている。

遺物

石室内から出土した遺物は、須恵器の杯蓋3点、杯身2点と土師器の杯1点である。その他、排水溝および周濠中から破損した須恵器片・土師器片・灰陶器片が出土した。出土した土器片はいずれも細片であって、完形に復元できたものは少ない。

所見

今回調査をおこなった塚脇D-1号墳は、河原石積の小型石室を有する一辺5mの方墳である。本古墳は、帶仕山の頂上に位置し、塚脇古墳群の中では最高所に構築されている。築造された年代は、石室内から出土した遺物によって、7世紀前半頃と推定され、本古墳の中では最も新しい時期に属するものである(大船)

61. 大藏司遺跡

所在地 高槻市宮ノ川原4丁目601-1

調査面積 450 m²

調査期間 昭和 56 年 4 月 6 日～11 日

届出理由 住宅建設

遺構・遺物

当該地は、式内社・神服神社の南方約 170 m に位置し、大藏司遺跡の範囲内では北限にあたる。調査は西側の道路面に接した建物部分について、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は耕土（0.3 m）、床土（0.1～0.2 m）、暗灰色土層（0.1 m）（整地層）であり、地山は北側が暗灰色砂礫層、南側が暗茶褐色土層となっている。

検出した遺構は、弥生時代後期の土壤 2ヶ所のみである。規模は径約 1.5～2 m、深さ 0.3 m を測り、埋土は下層が暗灰色粘土、中層が黄灰色粘土、上層が暗灰色粘土となっている。土壤の平面は、暗渠などによって搅乱を受けているために、正確な形状は不明である。

出土遺物は、土壤から弥生時代後期の土器片が 10 数点出土したが、いずれも細片であって、完形に復元できたものはなかった。その他の遺物としては、整地層と暗渠の埋土から奈良時代に属する須恵器・土師器片が少数出土した。これらの土器片は、いずれも表面が著しく摩滅を受けており、水田の改良工事の際に、他の場所から盛土に混って運び込まれたものと考えられる。

所見

今回の調査地は、大藏司遺跡の北限にあたり、遺構・遺物の分布が希薄などころである。昭和 55 年度におこなった南隣接地の確認調査でも、弥生時代後期の溝が検出されており、遺跡の広がりはもう少し北側まで延びていることが予測される。（大船）

62. 大藏司遺跡

所在地 高槻市浦堂 2 丁目 590-1 他

調査面積 15,238 m²

調査期間 昭和 56 年 5 月 11 日～7 月 28 日

届出理由 宅地造成

遺構

当該地は大藏司遺跡の北辺部にあたり、北 200 m のところには式内社神服神社が鎮座している。

遺構としては中世の落ち込み 2ヶ所と土壤 3基および弥生時代後期～古墳時代前期にかけての溝がある。中世の遺構は調査区の北寄りで検出している。落ち込み 1 は幅 10 m、長さ 15 m、深さ 0.1 m を測り、浅くて不整形なものである。落ち込み 2 は落ち込み 1 の東側で検出したもので、幅 7 m、長さ 10 m、深さ 0.1 m を測る。土壤 1 は落ち込み 1 と 2 の間で検出したもので、径 2 m、深さ 0.2 m の不整形円形を呈している。土壤 2 は落ち込み 2 の東側で検出したもので、径 1 m、深さ 0.2 m の円形を呈している。土壤 3 は落ち込み 2 の西寄りで検出したもので、径 1 m、深さ 0.2 m の円形を呈している。弥生時代～古墳時代の遺構は調査区の南寄りで検出している。溝 1 は幅 1.5 m、深さ 0.4 m を測り、ほぼ東西方向の流路を示している。溝 2 は幅 2～3 m、深さ 0.7～0.9 m を測り、蛇行しながら南南東へ流れている。溝 3 は溝 2 の流路をほぼ踏襲しており、幅 2 m、深さ 0.2～0.7 m を測る。埋土は大きく 2 層に分れ、下層からは弥生時代後期の土器が、上層からは古墳時代前期の土器が出土している。溝 4 は溝 3 から派生したもので、幅 1.5 m、深さ 0.2 m を測る。溝はほぼ南北方向に直線的な流れを示しており、用水路として利用されていた可能性がある。

遺物

遺物は各溝から出土した土器類が目立つ程度で、落ち込みから出土した須恵器・土師器・瓦器などはいずれも極小破片ばかりで、しかも 2 次的な混入品と考えられるものである。溝 2 からは、弥生時代後期最終末期～庄内式期にかけての壺・甕・鉢・器台が出土している。溝 3 からは布留式期の壺・甕・高杯が出土している。他に包含層から、弥生時代後期～古墳時代にかけての土器が若干出土しているが、いずれも破片ばかりである。また現水田下の暗渠から江戸時代前期の軒丸瓦・平瓦が出土している。

所見

当該地は大藏司遺跡の北端部と考えられていたと

ころであるが、調査の結果弥生時代～古墳時代にかけての遺構・遺物が発見され、周辺部に集落の埋もれている可能性が高くなつた。(森田)

63. 大蔵司遺跡

所在地 高槻市大蔵司3丁目207-8

調査面積 169.39 m²

調査期間 昭和57年8月16～17日

届出理由 住宅建設

遺構・遺物

当該地は、府立芥川高校の西方約50mに位置する。今回の調査地は、届出地の面積が狭く盛土が厚いため、全体を掘ることができず、建物の基礎部分についてのみ、遺構および地層断面の確認をおこなつた。層序は盛土(1.2m)、旧耕土(0.2m)、床土(0.1m)、暗灰色砂礫層〔地山〕となり、調査地内では遺物包含層を認めることができなかつた。また、調査トレンチが狭小なこともあって、遺構などもまったく検出することができなかつた。

所 見

大蔵司遺跡の北西部一帯は、芥川の氾濫による砂礫層が厚く堆積し、遺構の分布が希薄なところである。今回の調査地は中央部に位置することから、砂礫層の氾濫原が相当広くまで拡がっていることが考えられる。(大船)

64. 大蔵司遺跡

所在地 高槻市大蔵司2丁目121-4

調査面積 308.73 m²

調査期間 昭和57年11月8日

届出理由 住宅建設

遺構・遺物

届出地に2m×6mの試掘場を設定したが、遺構・遺物はまったく検出されなかつた。

所 見

当調査区の北側および東側では弥生時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が多量に発見されているが、当調査区付近から南側にかけては集落の外辺部

のようである。(橋本)

65. 大蔵司遺跡

所在地 高槻市大蔵司2丁目121-4

調査面積 308.73 m²

調査期間 昭和57年12月27日

届出理由 マンション建設

遺構・遺物

届出地の中央部に2m×10mの試掘場を設定したが、遺構・遺物はまったく検出されなかつた。

所 見

当調査区の東側では奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されているが、当調査区付近には拡がっていないようである。(橋本)

66. 芥川遺跡

所在地 高槻市柴町2

調査面積 36,000 m²

調査期間 昭和58年3月7日～4月9日

届出理由 グランド整備

遺構・遺物

専売公社高槻工場東側半分のグランド整備に先立って、クラブハウス・ネット等の部分について調査を実施した。調査はトレンチ調査が主となつたが、南東部では遺構・遺物はまったく検出されなかつた。

グランドを中心とする部分では、弥生第Ⅳ様式期の土器や流路が検出された。とくにクラブハウスの予定地のE区では、自然流路とみられる溝1から多量の第Ⅳ様式土器や庄内・布留式土器が検出されたのをはじめ、土壌墓・溝などが検出された。グランド西側のトレンチでも遺物包含層が確認されている。

所 見

芥川城に関連する遺構・遺物に関しては全く検出されなかつたが、芥川地域ではじめて弥生～古墳時代の遺跡を確認することができた。(橋本)

67. 上田部遺跡

所在地 高槻市上田辺町

調査面積 1,200 m²

調査期間 昭和 56 年 8 月 10 日～22 日

届出理由 阪急高架工事

遺構・遺物

阪急京都線の高架工事に先立って、工事予定地に幅 2～3 m、長さ 3～20 m の調査横を 11ヶ所設けて調査した。

予定地の西側は粘土・砂層が交互に堆積し、幅約 20 m の自然流路が確認された。東側でも幅数十 m の自然流路が確認されたが、その上部に鎌倉時代以後の南北方向の溝が検出された。溝幅 2 m、深さ 0.8 m で護岸の痕跡がある。弥生式土器、須恵器、瓦器等が各調査横から出土しているがいずれも遺構に伴うものではない。

所 見

奈良時代の集落が廃絶したあと、周辺は水田化されて近世になったものとみられる。(橋本)

68. 上田部遺跡

所在地 高槻市桃園町 842-7

調査面積 104.55 m²

調査期間 昭和 57 年 11 月 24 日～12 月 2 日

届出理由 貸ビル建設

遺構・遺物

10 m × 2 m の調査横を届出地の中央部に設定した。

地山は青灰色砂礫で、奈良時代の土壤と柱穴が検出された。土壤は長さ 1.7 m、幅 1 m、深さ 0.3 m である。柱穴は 4 個検出されたがまとまりはない。遺物は奈良時代の須恵器、土師器をはじめ、弥生第Ⅴ様式土器、縄釉陶器、製塙土器などが出土しているが、いずれも少破片である。

所 見

当調査区のすぐ南側は、昭和 44 年に天平七年銘の木簡などが出土した地区であり、奈良時代の集落の中心部とみられる。当調査区も狭小であるが、縄釉陶器なども出土しており、集落の一端であることを示している。(橋本)

69. 高槻城跡

所在地 高槻市城内町 1501-7

調査面積 700 m²

調査期間 昭和 59 年 3 月 1 日～2 日

届出理由 公園造成

遺構・遺物

当該地は底郭南端部にあたり、調査は幅 7 m、長さ 10 m のトレンチを設定しておこなったところ、底郭南端の西側内堀を検出した。堀底は確認できなかったが、地表面から 3.8 m 前後と考えられる。またトレンチの東西両端で護岸のかせ杭を検出している。東側は岸の上端に併行してもたせかけた幅 0.26 m、厚さ 0.1 m、長さ 4 m 以上の松板材を 0.4～0.5 m 間隔で打ち込まれた丸太杭(径 8 cm 前後)で留めている。西側は、岸の下端に 2 本の丸太材(径 6 cm 前後)を横にしたものと、面どりした杭(径 15 cm)で打ち留めているのが認められた。双方のかせ杭間は約 9 m あることから、検出した内堀の上縁での幅を復元すると約 12 m ということになる。遺物は内堀埋土から、瓦類・陶磁器類が出土している。

所 見

今回検出した堀跡は底郭南端の西堀と考えられ、西側のかせ杭については弁財天郭東端部とすることができるよう。当該地を絵図によって指摘しようとすれば、底郭と弁財天郭の連結部に設けられた回廊部に相当すると考えられる。(森田)

70. 高槻城跡

所在地 高槻市城内町 1501-7

調査面積 2,500 m²

調査期間 昭和 58 年 2 月 16 日～24 日

届出理由 公園造成

遺構・遺物

当該地は高槻城跡の底郭西辺部にあたり、調査は幅 2 m、長さ 12 m のトレンチを設定しておこなった。

トレンチ西半部において、堀跡を検出し、堀底は現地表面から約 3.7 m の深さにある。岸部は数段に

わたる段階によって形成されていて、上縁部には2本1組にしたと思われる丸太杭（径8cm前後）を、約0.4m間隔で打ち込み護岸している。また0.6mほど堀側に入ったところに、杭を打ち込んでいるのがみられる。郭側には明確な遺構を検出できなかつた。遺物は多くの瓦類をはじめとして、弥生土器（鐵内第Ⅱ様式）・須恵器・土師器・近世陶磁器の破片・釘などが出土している。

所 見

廠郭西端部の1点が明らかになり、高櫻城の縛張り復元にとって重要な知見が得られた。（森田）

71. 芝生遺跡

所 在 地 高櫻市芝生町4丁目372-1

調査面積 17.375 m²

調査期間 昭和58年4月12日～30日

届出理由 体育館建設

遺 構

市立体育館建設工事に際し、弥生土器が発見されたため、緊急調査を実施した。調査は4ヶ所のトレンチを設け実施した。

Aトレンチの層序は盛土・耕土・床土・整地層・青灰色粘土層・暗青灰色粘土層・黒灰色粘土層〔遺物包含層〕・暗青灰色粘土層〔地山〕となる。検出した遺構は弥生時代中期前半のピット4個と後期前半の土器群である。ピットは土壤状のものと柱穴状のものがある。土器群は南北8m、東西4mを測るが、トレンチ東側にさらに拡がっている。

Bトレンチの層序は盛土・耕土・床土・暗灰色土層・暗褐色土層〔遺物包含層〕・地山となる。遺構は検出されなかったが、包含層は極めて良好で遺物量も多く、近くに居住区のあったことが推定される。

C・Dトレンチの層序は盛土・耕土・床土・暗黃灰色粘土層・地山となり、遺物包含層や遺構は検出されなかった。

遺 物

弥生時代中期初頭と後期の土器片が2,000点余出土している。前者はAトレンチのピットに伴ったも

のと後期の包含層から出土し、後者はAトレンチの土器群と包含層、Bトレンチの包含層から出土している。中期の土器は壺と甕のみであるが、後期の土器は壺・鉢・高杯・器台・甕がある。なお後者には河内産の土器片が目立つ。

所 見

芝生遺跡はこれまでまったく認識されていなかつたものであり、今回の発見によって市域南部にも集落遺跡が確かめられたわけで、その意義は大きい。しかも出土遺物には弥生時代中期初頭と後期のものがあり、今後の調査如何によっては拠点集落になる可能性もでてくる重要な遺跡となろう。（森田）

72. 奥天神遺跡

所 在 地 高櫻市奥天神町

調査期間 昭和59年2月2日

届出理由 宅地造成

遺 構・遺 物

当該地は名神高速道路のすぐ南に隣接し、北には芝谷遺跡があり、南へ続く尾根には慈願寺山遺跡がある尾根の西斜面である。

分布調査を実施する。尾根の急な斜面で所處の切通しを観察するが遺物包含層らしきもの認め得なかった。（富成）

73. 天神山遺跡

所 在 地 高櫻市天神町1丁目1238

調査面積 1,051.58 m²

調査期間 昭和56年11月16日～17日

届出理由 寺院改築

遺 構・遺 物

当該地は天神山遺跡の北東部にあたり、以前より多くの弥生土器が採取されているところである。調査は乾性寺本堂除去後、トレンチ（3m×2m）を設けて実施した。

層序は黄褐色ないし灰褐色砂層の均整な互層である。調査の結果、遺構・遺物はまったく検出されなかつた。

所見

これまで当該地周辺域から多くの弥生土器が検出されているにもかかわらず、今回の調査では包含層から検出されなかった。このことは旧本堂建立時に大きく削平されたためと考えられる。さなみに境内を探索すると、あちこちに弥生土器片を見い出すことができた。なお、その際寛永通宝を1点採取している。(森田)

74. 天神山遺跡

所在地 高槻市天神町1丁目10

調査面積 379 m²

調査期間 昭和58年1月17日～25日

届出理由 マンション建設

遺構・遺物

当該地は天神山遺跡の北東部に位置し、すぐ東隣には中将塚古墳が所在する。

表土・遺物包含層を除去し精査したが、顯著な遺構は検出できなかった。遺物は包含層から弥生土器片とともに筒形器台・頸・五連壺・蓋杯を含む古式須恵器が出土している。

所見

弥生集落としての遺構は検出できなかったが、近隣地区の調査例からして、当該地が集落内に含まれるのは疑いないと思われる。また古式須恵器は隣接する中将塚古墳とは時期的な隔たりがあり、かつて付近に5世紀後半頃の古墳が存在していた可能性がある。(森田)

75. 天神山遺跡

所在地 高槻市天神町1丁目10-8

調査面積 3,010 m²

調査期間 昭和58年1月17日～31日

届出理由 公園造成

遺構

当該地は天神山遺跡の北東部に位置し、これまでに周辺部から弥生土器が数多く採集されている。調査は7ヶ所のトレンチを設けて実施した。

トレンチ1では、斜面地につくられた住居址を3基検出した。いずれも谷側に盛土をして築かれたもので、床面の1部と柱穴・側溝を検出している。また裾部近くで、幅3.2m、深さ1.0mと幅3.0m、深さ0.9mを測る南北方向の2本の溝を検出している。

トレンチ2では、径0.2～0.4m、深さ0.2～0.5mを測るビットを10個あまり検出している。トレンチが狭少なため判然としないが、住居址になる可能性がある。

トレンチ3では、径0.2m、深さ0.1～0.2mのビットや若干の落ち込みを検出している。

トレンチ4では、明確な遺構はみられなかった。

トレンチ5では、径0.2～0.7m、深さ0.1～0.5mを測るビットを25個程度検出しており、居住区になると思われる。

トレンチ6では、幅4m、深さ1.3mを測る東西方向の溝を検出している。

トレンチ7では、遺構はみられず、地表下1.7mで遺物包含層のみ検出している。

遺物

各トレンチから弥生土器を検出しているが、多量に出土したのはトレンチ1の2本の溝付近である。時期は畿内第II～IV様式までで、II様式は少量で大部分はIII・IV様式の土器である。また、石包丁、大型蛤刃石斧などの破片も出土している。

所見

天神山遺跡は丘陵性の集落であり、今回の調査地点も標高40～46mを測るところで、ちょうど東尾根筋の結節点にある。住居はトレンチ1で検出したように、尾根の平坦部から斜面にかけて営まれたと考えられる。また、トレンチ1と6の斜面下で検出した溝は居住区を画するものと考えられ、両者は同一遺構になる可能性がある。(森田)

76. 天神山遺跡

所在地 高槻市天神町1丁目10-4・5

調査面積 855 m²

調査期間 昭和58年1月17日

届出理由 宅地造成

遺構・遺物

当該地は、上宮天満宮の西方約50mに位置する。調査は届出地の中央部に幅1m、長さ10mの東西トレンチを2ヶ所設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。調査地はかなり以前に造成されていたらしく、表土下はすぐに地山になり、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。

所見

調査地は丘陵の急斜面裾部であることから、遺構・遺物の分布が希薄なことが考えられる。今回の調査では、以前の宅地造成などによって削平を受けていたためか、まったく遺構・遺物を検出することができなかった。(大船)

77. 天神山遺跡

所在地 高槻市天神町1丁目10-4・5

調査面積 878.89 m²

調査期間 昭和58年1月17日

届出理由 宅地造成

遺構・遺物

当該地は、上宮天満宮のすぐ西斜面に位置する。調査は届出地の中央部に幅1m、長さ10mの東西トレンチを設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。調査地は以前から土取り場などに利用されていたらしく、表土下はすぐに地山になり、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。

所見

調査地は丘陵の急斜面裾部であることから、遺構・遺物の分布が希薄なことが考えられる。今回の調査では、後世の土取りなどによって削平を受けていたためか、まったく遺構・遺物を検出することができなかった。(大船)

78. 安満遺跡

所在地 高槻市八丁畷町1-22

調査面積 13,624.02 m²

調査期間 昭和56年4月27日

届出理由 変電所建設

遺構・遺物

関西電力変電所の老朽化した建物の改築が計画されたため調査を実施した。建物はいずれも現状の盛土以下には基礎が達せず、遺構が在ったとしても影響を受けないものとみられるので、盛土以下の本格的調査は実施しなかった。(橋本)

79. 安満遺跡

所在地 高槻市八丁畷町3-3

調査面積 437.36 m²

調査期間 昭和56年5月14日

届出理由 共同住宅建設

遺構・遺物

届出地中央部に3m×10mの調査 sondage を2ヶ所設けたが、いずれも盛土(0.8m)、耕土(0.2m)、青灰色砂質土層(0.3m)、黄灰色粘土層(0.2~0.4m)と堆積し、以下は青灰色粘土層と砂層の互層がつづき、遺構・遺物は確認できなかった。

所見

安満遺跡の東南部への拡がりの限界とみられる。(橋本)

80. 安満遺跡

所在地 高槻市八丁畷321-1、367-1

調査面積 200 m²

調査期間 昭和56年12月11日~昭和57年3月30日

届出理由 遺跡の遺構確認調査

遺構

今回の発掘調査は、安満遺跡を史跡指定するためにおこなった遺構確認調査である。調査地および調査方法については、地元との協議によって、京大農場と国鉄に挟まれた水田地帯を大きく5ブロックに分け、各ブロックごとに10m角のトレンチを設け、2年計画で実施することになった。今年度はまず西側に位置するA・Bブロックに設定した2ヶ所のトレンチを調査した。

Aトレンチ

今回の調査範囲予定地内では、最も西側に位置し、京大農場事務所から北西方約180mのところである。

トレンチの層序は、耕土(0.2m)、暗黄褐色砂礫層(0.2m)、暗灰色バラス層(0.2m)、青灰色バラス層(0.4m)、青緑色砂質粘土層〔地山〕であり、耕土下に床土は認められなかった。

検出した遺構は、4層に分けられる。上層遺構は、落ち込み2ヶ所、溝2条、柱穴などである。時期は落ち込みが畿内第Ⅱ様式のもので、溝・柱穴は畿内第Ⅱ様式に属する。中層遺構は、方形周溝墓1基と土器溜1ヶ所である。時期は方形周溝墓が畿内第Ⅲ様式でも新しい段階に位置づけられ、土器溜が畿内第Ⅰ様式である。下層遺構は、溝1条と土器溜1ヶ所である。時期は两者とも畿内第Ⅰ様式である。最下層の地山面で検出した遺構は、トレンチ中央部に位置する大溝である。時期については明確でないが畿内第Ⅰ様式に属するものであろう。

Bトレンチ

Bトレンチは、京大農場事務所から北西方約150mに位置する。層序は耕土(0.2m)、床土(0.1~0.2m)、黒色土層(0.1~0.2m)〔遺物包含層〕、暗灰色砂礫層~暗茶褐色土層〔地山〕である。

検出した遺構は、弥生時代前期の溝1条、土器溜1ヶ所、中期の竪穴住居1棟・土壤1基・多数の柱穴、後期の方形周溝墓1基などである。特に今回の調査地は、安満遺跡の範囲の中でも中心地に近いこともあって、各時期の遺構が重複して一同地山面で検出された。

遺物

遺物としては、A・B両トレンチから土器・石器をはじめとして、流木などが検出されている。土器は両トレンチ合わせて、コンテナ約70箱分を検出した。土器の時期は総じて中期の土器、それも畿内第Ⅲ・第Ⅳ様式のものが多く、つづいて、畿内第Ⅰ・第Ⅱ様式のものが目立った。反面畿内第Ⅴ様式の土器の少なさも注意を惹く。トレンチ別の出土量は、調査面積がほぼ同じにもかかわらず1:3の比率になり、Bトレンチの方が前期・中期とも圧倒的に多

い。これは集落の居住地域と各トレンチの距離であろう。

所見

今回の両トレンチの調査では、方形周溝墓や竪穴住居址、柱穴など多数の遺構・遺物を検出した。特に今回検出した遺構の中で注目すべき点は、Bトレンチの柱穴群と竪穴住居址である。この調査区は昭和43年に調査された環濠の北側に位置し、出土する遺物から弥生時代前期から中期に至る集落遺構であることが明らかとなった。安満遺跡のこれまでの調査では、住居の明らかにできる資料が乏しく、住居地域の変遷を知るまでに至っていない。今回検出した竪穴住居址は、当遺跡の全体像を組み立てる上で重要な資料といえよう。(大船)

81. 安満遺跡

所在地 高槻市高垣町279-1

調査面積 942.14 m²

調査期間 昭和57年3月8日~5月18日

届出理由 社員寮建設

遺構・遺物

安満遺跡の北部にあたる。上層から奈良時代の堀立柱建物3棟と下層から古墳時代の竪穴式住居1棟と弥生第Ⅱ様式期の方形周溝墓1基が検出された。竪穴式住居は一辺が4.4~4.6mの方形プランを呈し、東側の地山を削って約1mのベッド状遺構をつくる。方形周溝墓は溝底から第Ⅱ様式の壺が検出され、溝上部には第Ⅴ様式土器が多い量に投棄されていた。遺物は多量の第Ⅴ様式土器が方形周溝墓から出土したのをはじめ、奈良時代の製塙土器・土師器・須恵器などが出土している。

所見

安満遺跡東部における方形周溝墓群が北へも拡がっていることがわかった。また、古墳時代にも集落が営まれていることが初めて確認できた。(橋本)

82. 安満遺跡

所在地 高槻市八丁畷町3-3

調査面積 252.66 m²

調査期間 昭和57年8月12日～14日

届出理由 共同住宅建設

遺構・遺物

当該地は京都大学附属農場の西に位置する。層序は盛土(0.8m)、旧耕土(0.2m)、青灰色粘土(0.5m)、灰青色粘土となり、遺構はまったく認められなかった。遺物は青灰色粘土層に若干の弥生式土器片と流木程度の木片を散見するにすぎない。(蓄成)

83. 安満遺跡

所在地 高槻市八丁畠町252-1、226-3、390

調査面積 300 m²

調査期間 昭和57年11月15日～昭和58年2月22日

届出理由 遺跡の範囲確認調査

遺構

今回の発掘調査は、安満遺跡を史跡指定にするためにおこなった遺構確認調査である。今年度は昨年度に引き続き、東側に位置するC・D・Eブロックの各トレンチを調査した。

Cトレンチ

Cトレンチは、京大農場事務所から北東約160mに位置する。層序は耕土(0.2m)、床土(0.3m)、黄褐色土層(0.1～0.3m)、暗褐色土層(0.2m)、黄灰色砂質土層〔地山〕である。

検出した遺構は少なく、トレンチの中央部から北側にかけて、溝2条、土壤1基と大小の柱穴などがある。時期は弥生時代中期から5世紀前半にかけてのものであるが、出土遺物が少なく各遺構の時期を明確にすることはできなかった。

Dトレンチ

Dトレンチは、Cトレンチの北東方約150mに位置する。層序は耕土(0.2m)、床土(0.05～0.4m)、暗茶褐色土層(0.15m)〔遺物包含層〕、黄褐色土層〔地山〕である。検出した遺構の多くは北側に集中しており、畿内第Ⅱ様式の溝2条と5世

紀前半の溝2条、土器窪2ヶ所と時期不明の溝1条、土壤4基、柱穴などがある。土器窪・土壤などはトレンチの中央部で検出したが、溝などは調査範囲が限られたことから、規模・性格などについては不明な点が多い。

Eトレンチ

Eトレンチは、今回の調査範囲予定地では最も東側に位置する。層序は耕土(0.2m)、床土(0.2～0.3m)、暗茶褐色土層(0.05～0.5m)、黄褐色土層～暗茶褐色土層〔地山〕である。

検出した遺構は、弥生時代中期前半の方形周溝墓4基である。調査範囲が限られたことから、埋葬施設および規模などについては不明な点が多い。

遺物

各トレンチの出土遺物は、検出した遺構が少ないので、全体的に乏しい。Cトレンチでは、中央部北寄りで検出した溝から、弥生時代中期に属する石器6点を一括で検出した。石器はいずれも荒削段階のもので、内訳は石庖丁1、柱状片刃石斧3、扁平片刃石斧2である。Dトレンチでは、溝・土器窪から出土した畿内第Ⅱ様式および布留式併行期のものがあるが、いずれも小破片のものばかりであって、完形に復元できたものは少ない。その他に、北西部の溝から出土した板材、加工痕のある丸太材、流木などの木製品がある。Eトレンチから出土した遺物は、方形周溝墓に供献された土器と、周溝内に流入した土器に分けられる。供献土器には畿内第Ⅱ様式の大型の壺などがある。その他、周溝内に流入した遺物として、縄文時代晚期の船橋式の土器片が1点ある。

所見

昨年度の調査に引き続いて、史跡指定に伴う確認調査を3ヶ所のトレンチを設定しておこなった。各トレンチからは、遺構・遺物が顕著にみとめられ、改めて、安満遺跡の重要性が認められた。また、安満遺跡の立地を考える上で貴重な資料を提供した。すなわち、扇状地上に立地する集落といえども、その旧微地形は複雑であり、今回のように遺跡全体を

意識的な抽出によりトレンチを設定した結果、空間利用が極めて微地形に左右されていることが判明した。(大船)

84. 安満遺跡

所在地 高槻市高垣町 21

調査面積 1,328 m²

調査期間 昭和 58 年 4 月 18 日～5 月 11 日

届出理由 分譲住宅建設

遺構・遺物

弥生第Ⅱ様式期の方形周溝墓10基を検出した。規模は一辺 6.5 ～ 9 m 程度で、いずれも溝底から第Ⅱ様式土器の壺・甕・鉢が出土している。最も規模の大きい (9.0 × 9.5 m) 周溝墓に接して、一辺 3.5 m の小型周溝墓が一基検出されている。

所見

安満遺跡東南部の方形周溝墓群はこれまでの調査とあわせて 70 基以上となった。(橋本)

85. 安満遺跡

所在地 高槻市八丁畷町

調査面積 60 m²

調査期間 昭和 58 年 4 月 23 日～24 日

届出理由 阪急高架工事

遺構・遺物

当該地は、京都大学高槻農場の正門から東方約 150 m に位置する。調査は東西 5 m 、南北 3 m のトレンチを 2ヶ所設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。基本的な層序は、盛土 (0.3 m) 、旧耕土 (0.2 m) 、床土 (0.2 m) 、暗褐色土層 (0.3 m) 、茶褐色土層 (0.2 m) 、茶灰色土層 (0.1 m) 、黄褐色土層 (0.2 m) 、青緑色土層 (地山) である。

今回の調査区では、まったく遺構・遺物を検出することができなかった。

所見

今回の調査地は、安満遺跡の南側に位置し、遺構・遺物の分布が希薄なところである。昭和 55 年 3 月、農場の正門のすぐ東側で弥生時代前期の井堰が検出

され、この付近一带に水田址が広がっていることが推測された。今回の調査区では、明確な遺構を検出することができなかつたが、層序の堆積状況などから水田址であった可能性が考えられる。(大船)

86. 安満遺跡

所在地 高槻市高垣町

調査面積 150.5 m²

調査期間 昭和 58 年 8 月 25 日～27 日

届出理由 阪急高架工事

遺構・遺物

高架工事に伴う橋脚の基礎部分について立合調査を実施したが、床土以下は黄灰色土層 (0.3 m) 、青灰色の砂礫層が厚く堆積するだけで遺構・遺物はまったく検出されなかった。

所見

安満遺跡東南部の方形周溝墓群は阪急京都線までは拡がっていないようである。(橋本)

87. 安満遺跡

所在地 高槻市八丁畷町

調査面積 26 m²

調査期間 昭和 58 年 10 月 17 日～19 日

届出理由 下水道工事

遺構・遺物

基本層序は盛土・耕土・床土・茶灰色土層・灰色疊土層 (地山) で、遺構・遺物はみられなかった。

所見

本調査区北側で木棺および方形周溝墓が調査されていることから、その検出が期待されたが果せなかつた。安満遺跡の南限を探る際、ひとつ資料になろう。(森田)

88. 安満遺跡

所在地 高槻市高垣町 11・12・13

調査面積 2,311 m²

調査期間 昭和 59 年 2 月 27 日～5 月 9 日

届出理由 分譲住宅建設

遺構・遺物

安満遺跡東南部の方形周溝墓群のつづきである。いずれも弥生第Ⅱ様式期とみられ、18基を検出した。いずれも周溝を共有あるいは接するように形成されている。

今回検出されたなかで長も規模の大きい44号周溝墓は $13\text{ m} \times 10.5\text{ m}$ を測り、南側に周溝を共有あるいは接するようにして、一辺 $5\text{ m} \sim 6\text{ m}$ の規模の小さい周溝墓が形成されていた。

同様に55号($10.2\text{ m} \times 7.6\text{ m}$)の周囲にも小規模な周溝墓が形成されていた。各周溝から弥生第Ⅱ様式の壺・甕が出土している。

所見

規模の大きい周溝墓を中心にしてグループが形成され、それがまた周溝を接して連なっていることが想像されるが、周溝墓群の中のグループ分けが可能である。(橋本)

89. 安満北遺跡

所在地 高槻市安満中の町483

調査面積 324.65 m^2

調査期間 昭和58年7月29日～8月11日

届出理由 個人住宅建設

遺構・遺物

当該地は、本遺跡の東側に位置し、すぐ南側を西国街道が東西に走っている。調査は盛土が厚いため、北・南側の2ヶ所にトレンチを設けて、遺構の確認と層序の観察をおこなった。両トレンチの基本的な層序は、盛土(0.4m)、旧耕土(0.2m)、床土(0.2m)、暗褐色土層(0.2m)(遺物包含層)、青灰色砂礫層(地山)である。

遺構は南側トレンチの西端で深さ0.1mの浅い落ち込みを1ヶ所検出した。落ち込みの規模および性格などについては、調査範囲が限られたこともあって明確でない。

出土遺物は、北側トレンチの遺物包含層から布留式の壺片が数点出土した他、南側トレンチの遺物包含層から弥生時代後期の壺・甕片が若干出土した。

これらの中には、特徴的な生駒西麓産と認められる壺片などがある。

所見

安満北遺跡は、安満中の町を中心に拡がる弥生時代から古墳時代にかけての集落址で、標高12～15mを測る。発掘調査は、これまで数回おこなわれているが、いずれも周辺部の開発に伴うもので、明確な遺構はまだ検出されていない。(大船)

90. 梶原寺跡

所在地 高槻市梶原1丁目382-2

調査面積 243.273 m^2

調査期間 昭和56年11月20日～21日

届出理由 個人住宅改築

遺構・遺物

届出地の中央部に $3\text{ m} \times 2\text{ m}$ の調査場を設定したが、約1mの盛土下に青灰色砂質粘土層(0.7m)が堆積し、下層は青灰色砂礫層となる。近世唐津焼の碗を1点検出したが、他に遺構・遺物は認められなかった。

所見

梶原寺跡の南限とみられ、伽藍配置に関する手がかりが得られるのではと期待されたが、今回の調査では何も得られなかった。(橋本)

91. 梶原南遺跡

所在地 高槻市五領町

調査面積 $1,500\text{ m}^2$

調査期間 昭和59年1月6日～3月21日

届出理由 住宅建設

遺構

当該地は、市立五領小学校のすぐ東側に位置する。今回、府営住宅の老朽化に伴って、中層住宅の新築工事が計画されたため、第1工事分として住宅棟3ヶ所、浄化槽1ヶ所について、事前に発掘調査を実施した。

検出した遺構は、4ヶ所のトレンチから大小の溝6条と落ち込み1ヶ所がある。

溝1はCトレンチの西側で検出した南北溝で、幅1.5m、深さ0.7mを測り、断面はU字形を呈する。埋土は暗灰色土層と黒灰色粘土層が互層になって4層認められ、溝底から弥生時代後期の壺片と手づくね土器が出土した。溝2はB・Cトレンチの西側で検出した幅の広い南北溝で、幅約3m、深さ0.9mを測る。埋土は暗褐色土層～黒灰色砂質土層が5層認められ、溝底から中央部にかけて弥生時代中期から5世紀末の遺物が少量出土した。溝3はB・Cトレンチの中央部で検出した南北溝で、幅2.2m、深さ1.2mを測り、断面はV字形を呈する。埋土は暗灰色砂質土層と黒灰色粘土層の互層で7層認められた。溝中からはまったく出土遺物は認められなかつた。溝4はDトレンチの西側で検出した南北溝で、幅1.5m、深さ0.4mを測る。埋土は黒褐色粘土層で、中央部に壺跡と考えられる木杭2本が検出された。出土遺物はまったく認められず、所属時期については不明である。溝5はDトレンチの東側で検出した南北溝で、幅1.6m、深さ0.9mを測り、断面はV字形を呈する。埋土は黒灰色砂質土層と黒灰色粘土層の互層で5層認められたが、出土遺物はまったく認められなかつた。溝6はAトレンチの東側で検出した南北溝で、幅1.1m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色粘土層が1層のみで、出土遺物はまったく認められなかつた。落ち込みはBトレンチの東側で検出した浅い落ち込みである。東・北側の大部分が調査区域外にあるため、規模・形状等については不明な点が多い。埋土は暗褐色土層と黒灰色粘土層の2層で、出土遺物はまったく認められなかつた。

遺物

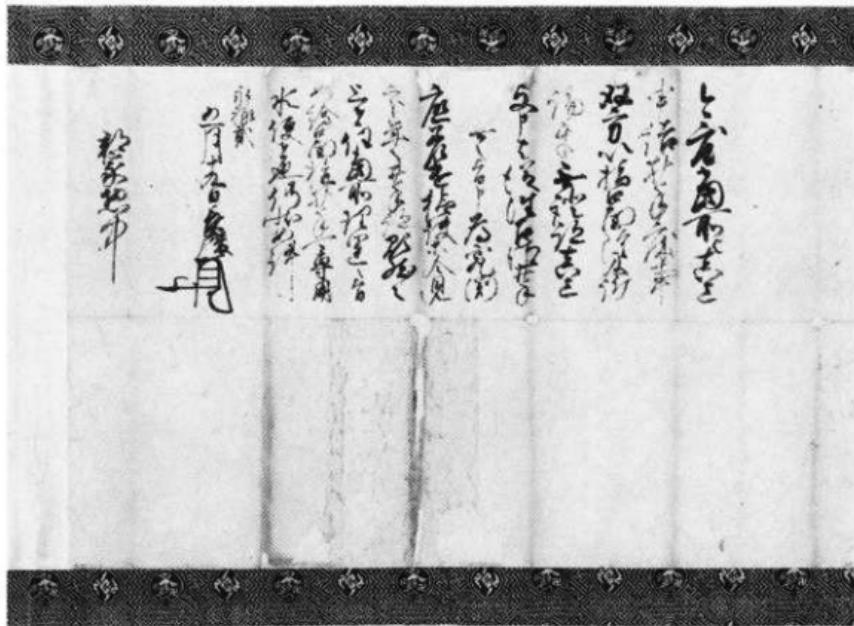
各トレンチの暗褐色土層（遺物包含層）からは、弥生時代中期から奈良時代にかけての土器片が多量に出土したが、いずれも細片のものばかりであって、完形に復元できたものはない。包含層中の出土遺物は、5世紀末頃の須恵器片が大部分であって、蓋杯・高杯・壺・甕・縁・器台等の豊富な器種構成が認められる。また、土器片に混って細片であるが、奈良時代の瓦片が少量出土している。

溝中からは、比較的出土遺物が少なく、溝2から須恵器の壺・高杯が完形に近い状態で出土した以外、いずれも細片のものばかりで、全形を知れるものはない。その他、溝1から出土した小形の手づくね土器がある。

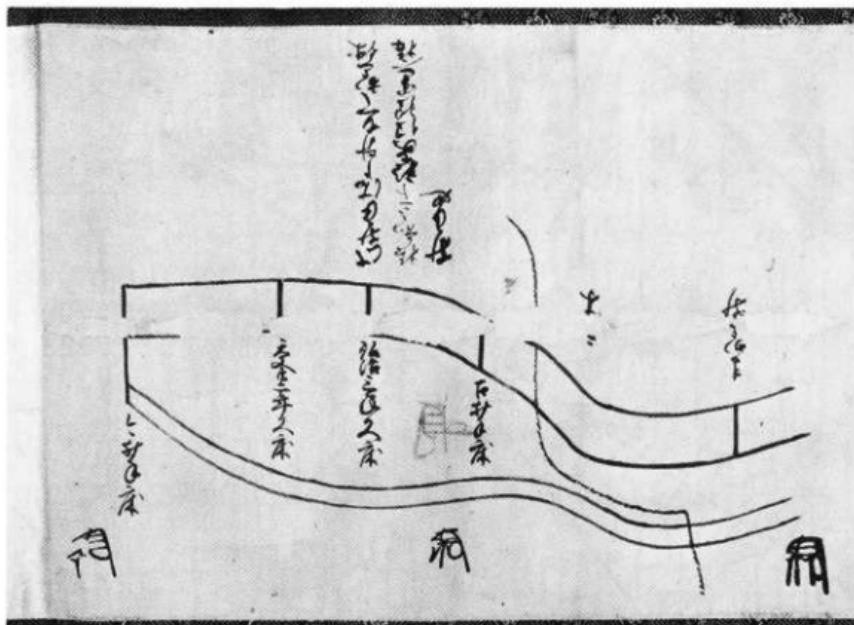
所見

今回の調査で検出した遺構は、溝6条と落ち込み1ヶ所である。部分的なトレンチによる調査のため、南北に走る溝がどのような性格をもつものであるか、十分解明するまでにいたっていない。しかしながら、梶原遺跡は弥生時代中期から奈良時代に至る複合遺跡で、当該調査区を含めた一帯での調査例が少ないので、松尾川東部の情況を知る上で貴重な資料といえる。（大船）

図 版



a. 三好長慶水論裁決状



b. 三好家奉行衆連判裁許井手絵図

埋蔵文化財調査位置図





市

方

市



a. (埋1)空中写真〔南側から〕



b. (埋1)第18トレンチ〔西側から〕



a. (埋7) B区A群〔西南側から〕



b. (埋7) B区木棺基〔南側から〕



a. (埋7) C区上層遺構〔南側から〕



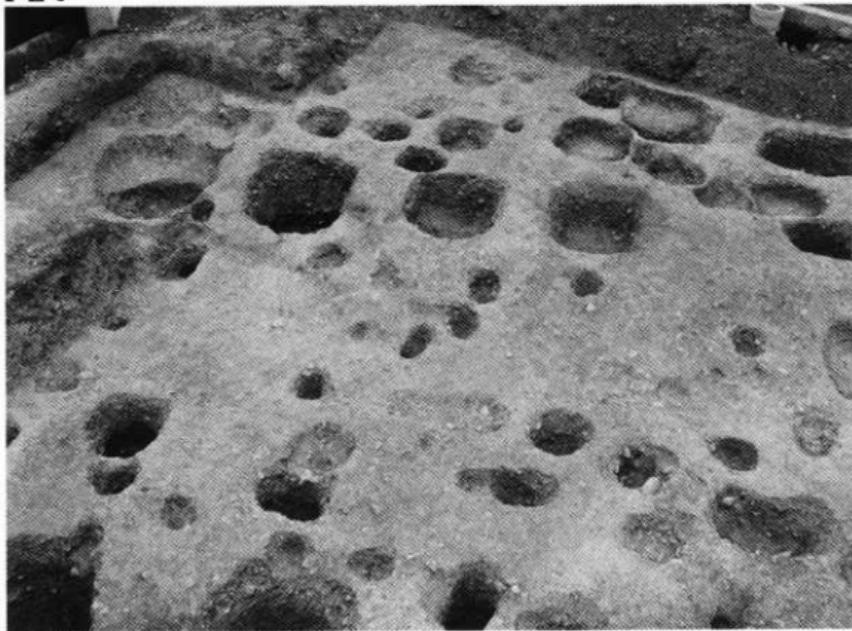
b. (埋7) C区下層遺構〔南東側から〕



a. (埋8) A-3号墳主体部東半〔南側から〕



b. (埋27) 調査区全景〔北側から〕



a. (埋33)西調査区〔南側から〕



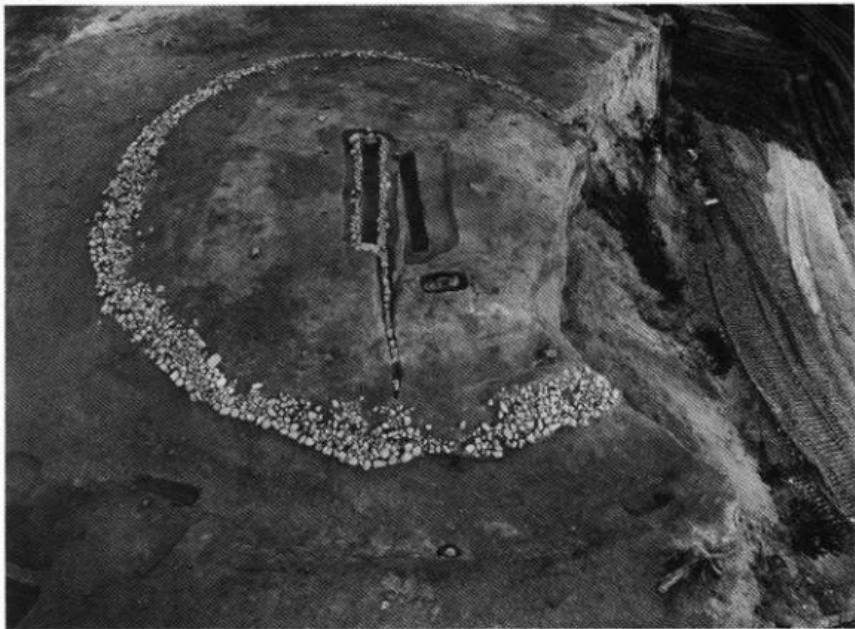
b. (埋33)西調査区〔北側から〕



a. (埋41)南・東調査区〔東側から〕



b. (埋41)竪穴式住居〔北側から〕



a. (埋47)尼ヶ谷A-1号墳〔西側から〕



b. (埋47)尼ヶ谷B支群全景〔南側から〕



a. (埋47)尼ヶ谷B支群〔北西側から〕



b. (埋47)唐井谷B支群〔東側から〕



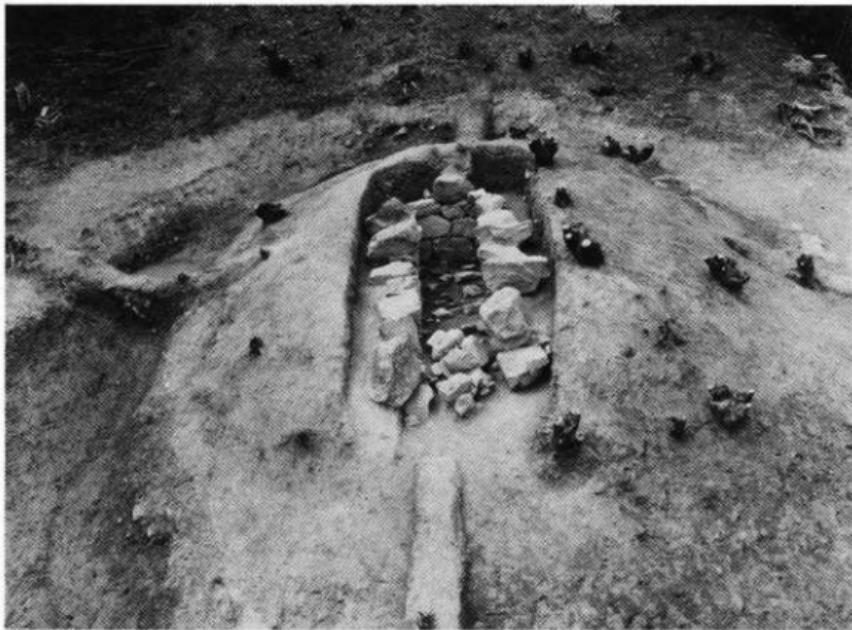
a. (埋56) 遺跡上層全景 [南側から]



b. (埋56) 遺跡下層全景 [南側から]



a. (埋58) C-6号墳〔南側から〕



b. (埋58) C-7号墳〔前面から〕



a. (埋60) D-1号墳〔前面から〕



b. (埋58) E-1号墳〔前面から〕



a. (埋66) 調査区全景 [北から]



b. (埋71) A トレンチ [南側から]



a. (埋80) Aトレンチ中層方形周溝墓〔北側から〕



b. (埋80) Bトレンチ〔北側から〕



a. (埋81)調査区全景〔東から〕



b. (埋83) Cトレンチ〔北側から〕

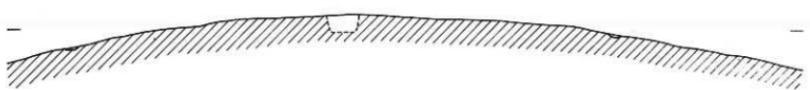
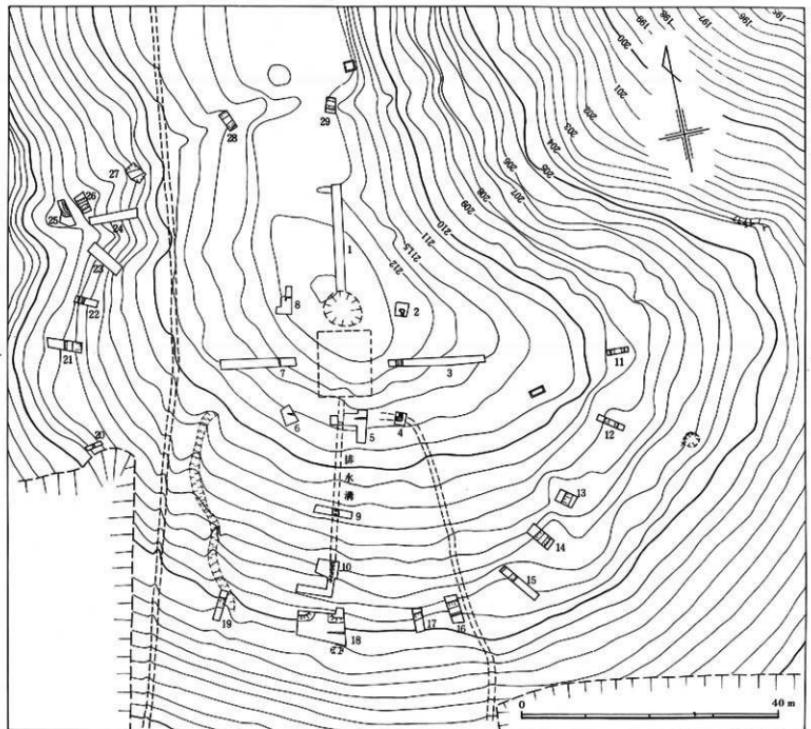


a. (埋 83) Eトレンチ方形周溝墓の土器群〔北側から〕

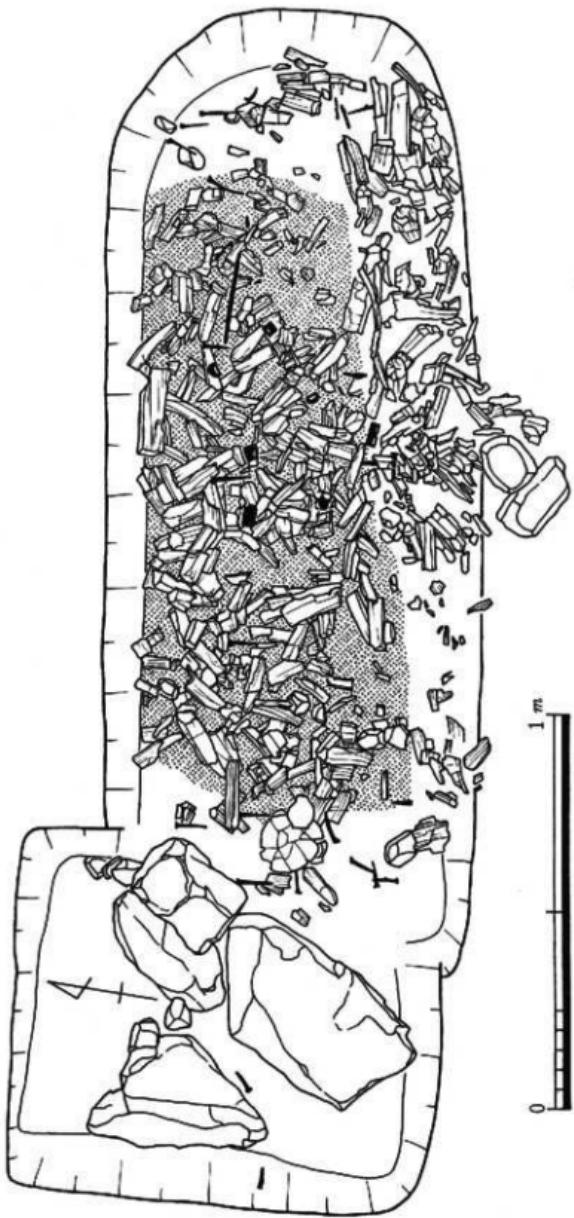


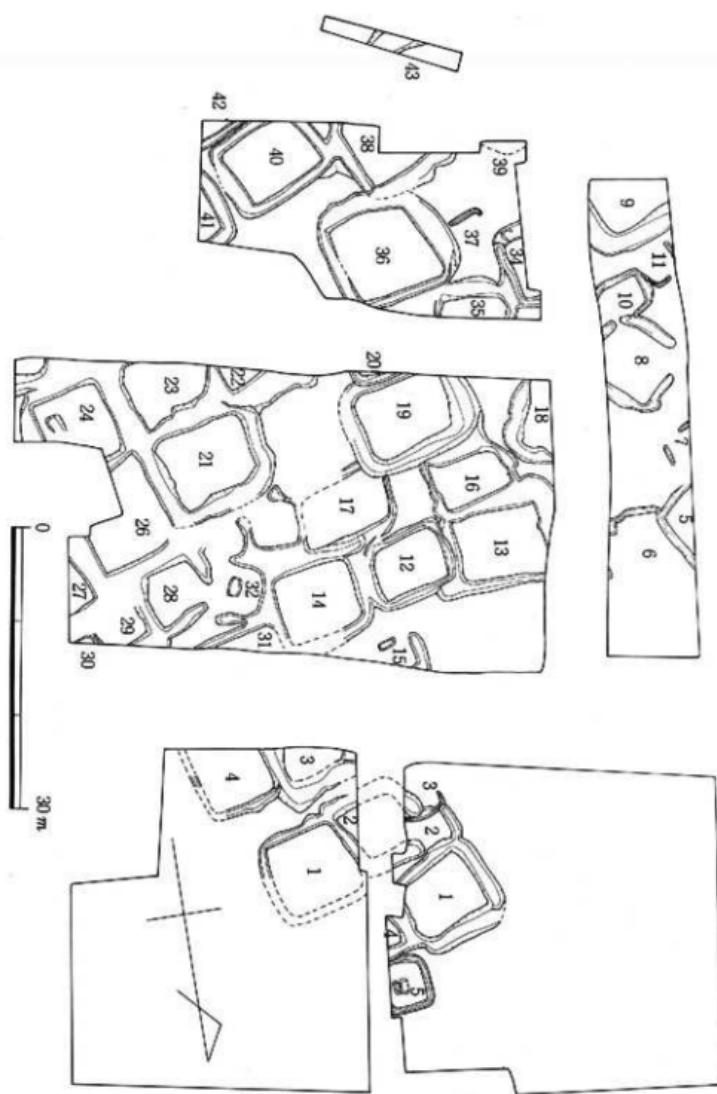
b. (埋 84) 調査区全景〔北側から〕

(埋1) 阿武山古墳









昭和 56・57・58 年度高槻市文化財年報

昭和60年3月30日

発行者 高槻市教育委員会 社会教育課
高槻市桃園町2番1号

印刷者 邦文社 印刷所
大阪市東淀川区大隅一丁目5番18号